

NEW ZEALAND NOTES

ニュージーランド・ノート

第 16 号

2014 年 3 月 31 日発行

【巻頭言】

核を持たぬ国・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・齊藤 達雄 1

【研究報告】

ニュージーランドにおける高等教育改革の進展～2012 年 9 月の現地調査報告を中心に～
 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・水田 健輔 2

カンタベリー地震の復興行政～復興戦略・復興計画を中心とした 2013 年中の動向～
 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・和田 明子 8

マオリ神話の昔話性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・橘 日出来 16

【ニュージーランド滞在記】

オークランドでの古書店巡り・・・・・・・・・・・・・・・・・・山岡 道男 22

ニュージーランド紀行～シャクナゲを追う・・・・・・・・・・宮本忠・宮本由紀子 29

【ニュージーランド短期語学留学】

第 11 回ニュージーランド短期留学に同行して・・・・・・・・・・菅井マリー 37

ニュージーランドでのインターンシップを終えて・・・・・・・・・・古城 楓子 38

New Zealand 体験記・・・・・・・・・・・・・・・・・・酒井 貴大 41

New Zealand でのファームステイ・・・・・・・・・・・・・・・・佐久間有紗 43

ニュージーランドでの短期語学留学・・・・・・・・・・・・・・・・高橋 一輝 45

ニュージーランドでの貴重な生活・・・・・・・・・・・・・・・・長橋 愛海 48

ハミルトンでの日常の一コマから・・・・・・・・・・・・・・・・野口 彰太 50

【シンポジウム報告】

シンポジウム「東日本大震災・復興を考える」開催報告・・・・・・・・・・和田 明子 52

【研究所から】

『ノート』メモ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

NEW ZEALAND NOTES

Vol.16

March 2014

【Opening Remarks】

A Nation without Nuclear Power Tatsuo SAITO 1

【Research and Reports】

Intended and Unintended Consequences of Tertiary Education Reforms in New Zealand: from the Interview with Tertiary Education Commission in September 2012

. Kensuke MIZUTA 2

Public Administration on Recovery from the Canterbury Earthquake: Trends in 2013

. Akiko WADA 8

Maori Myths and Old Tales Hideki TACHIBANA 16

【Days in New Zealand】

Visiting Secondhand Bookshops in Auckland Michio YAMAOKA 22

Trips to New Zealand: Following Rhododendrons Tadashi & Yukiko MIYAMOTO 29

【Reports from Students on the Study Abroad Programme in New Zealand】

Accompanying Students on the Study Abroad Programme in New Zealand Maree SUGAI 37

The Internship Programme in New Zealand Fuko KOGI 38

Experiences in New Zealand Takahiro SAKAI 41

Farm Stay in New Zealand Arisa SAKUMA 43

The Study Abroad Programme in New Zealand Kazuki TAKAHASHI 45

Precious Life In New Zealand Manami NAGAHASHI 48

Daily Life in Hamilton Shota NOGUCHI 50

【Symposium】

Report from Symposium on 'Recovery from the Great East Japan Earthquake'

. Akiko WADA 52

【From the Institute for New Zealand Studies】

Notices 54

【巻頭言】

核を持たぬ国

齊藤 達雄（元ニュージーランド研究所長）

「小さな大国」ニュージーランドは非核南太平洋諸国の重要な一員である。「原発」は持たない。「核兵器」も持たない。「核」を持ち込ませない。一時通過もさせない。

あれは1985年2月のことだった。時のデビッド・ロンギ新政権（労働党）は盟友・米国の駆逐艦「ブキャナン」（核積載可能）の寄港を拒否したのである。米国は怒りくるったが、反核政策は選挙中の公約であり、こうして「核の一時持ちこみ」の可能性を廃した。非核三原則の完全実施である。

その結果、米国との外交関係が悪化した。米国はニュージーランドとの（軍事的）合同演習の拒否などの措置をとり、さらに86年8月には「ニュージーランド防衛の義務はおわない」と宣言、こうしてそれまで35年間続いたオーストラリア・ニュージーランド・米国相互安全保障条約（アンザス条約）体制からニュージーランドは外された。

しかしニュージーランドは平静だ。ロンギ首相は1987年8月の総選挙で政権継続（2期目）を決めたが、選挙中にも非核維持を訴えた。「アンザスは核同盟ではない」「核兵器はニュージーランドの防衛にとって適切ではなく、むしろ有害だ」「非核ニュージーランドのために投票しよう。この国流の豊かな生活のために投票しよう」。

ロンギ氏は20歳のとき、北方の夜空に「オーロラ」を見た。そのオーロラとは、実は米国の核実験による大気・オゾンの反応だった。この時の実験場は、北太平洋のジョンストン島（大ざっぱに言えばホノルルとマーシャル諸島との中間。なおマーシャル諸島にはビキニ環礁がある）だった。そしてロンギは思った。「われわれの南太平洋が、北半球のラボラトリー（理科実験室）になっていいのか。ノーだ」。

1987年6月4日、ロンギ政権は議会で反核法*を通過させた。内容をひとことではいえず、「核」は持たず、持ち込ませないという法律である。（参考までに日本の非核三原則は、1972年の国会決議）。

* 「反核法」は正式には「非核地帯・軍縮・軍備管理法」とよばれ、核爆装置および廃棄物の保有・実験・貯蔵を禁止するとともに核兵器積載さらには原子力推進の艦船と軍用機の来訪を禁じている。廃棄物もだめなのだ。

【研究報告】

ニュージーランドにおける高等教育改革の進展 ～2012年9月の現地調査報告を中心に～

水田健輔（東北公益文科大学）

1. はじめに

ニュージーランド（以下、「NZ」とする）の高等教育改革、特に大学等に対するファンディングの改革については、すでに水田（2007）および水田（2012）において、その歴史的経緯や制度設計の概要をご紹介している。そこで、本稿では、2012年9月に（独）経済産業研究所のプロジェクトの一環として実施された現地調査、主として高等教育委員会（Tertiary Education¹ Commission: TEC）でのヒヤリング内容から、水田（2012）発表後の改革の進展等について追加情報をご紹介する。なお、最新の情報について若干の追跡を行ったが、本稿執筆時点（2014年5月）で、現地調査実施から既に1年半以上が経過しているため、一部の情報は古くなっている可能性があり、予めお断りしておく。

2. 国民党政権下の高等教育政策

2.1. 新政権の関心

2008年の総選挙後に発足し、2011年に2期目を迎えた国民党政権の高等教育セクターに関する政策的関心事については、「学生達成度コンポーネントにより適切なインセンティブを付与すること」「機関間の取り扱いの平等化を図ること」「産業に直結する成果を重視すること²」を代表的なものとして挙げることができる。

2.2. 学生達成度コンポーネント（Student Achievement Component: SAC）の変化

ニュージーランドの高等教育機関に対する財源配分は、1980年代に出来た「学生コンポーネント（Student Component）」による在学生比例配分が2000年代の半ばにTEOコンポーネントやその他の裁量的配分資金に細分化されたが³、結局は再度SACに集約され、単純化が図られた。

SACの大部分は、8つの大学、18のポリテクニク、3つのワナンガに配分されており、民間訓練施設等への配分は非常に少なかった⁴。これに対して、国民党政権は平等化の方針を打ち出しており、機関類型の間での配分レートを近づけている。また、就学者に対する平等化施策もとられており、マオリおよび太平洋諸島住民、身障者の修学を促進するための平等化資金（equity funding）が配分されている。ただし、身障者に

¹ Tertiary Education は、本来、高等教育（Higher Education）を含む中等後教育を幅広く指しているが、「第三次教育」等の用語が日本語では一般的ではないため、本稿では「高等教育」とする。

² 政権の Commercialisation Agenda にもとづくものであり、以下ではこの用語を「産業化施策」と訳する。

³ 詳細は、水田（2012, 10-13）参照。

⁴ NZの高等教育機関の類型については、水田（2012, 2-3）参照。

関しては在学学生実数と関係なく各教育機関の所管地域の人口に比例して配分されている。

2.3. SACの業績連動ファンディングの導入

「コース修了率」「学生残存率」「学位取得率」「上位学位進学率」の4指標を使用して、SACの一部を傾斜配分する試みが2012年から始まっている⁵。この4指標については、すべてのコースで同じウェイトがついている訳ではなく、レベルの低いコースは「コース修了率」と「学生残存率」、レベルの高いコースは「学位取得率」と「上位学位進学率」に重みづけがなされている⁶。ただし、傾斜配分額はSACの総額の5%以内とされており、2012年の試行計算では、SAC総額20億NZドル中300万NZドルとされている。

ちなみに、TECは常に高等教育機関の業績をモニタリングしており、業績の悪い機関に対して介入する権限を持っている。よって、TECとしては、無理にファンディングと連動させる必要を感じていない。また、2008年以降、新政権は高等教育機関の業績指標を公表しているため、一般国民からのプレッシャーがかかっていると判断している。

ただし、2013年度以降、最下層レベル（Level 1-2）の質向上を目指して、SACの予算枠をLevel 1-2と3以上に分割しており、Level 1-2については競争的配分部分と残りに分けられている⁷。当初、2012年に2013-14年度の競争的配分が行われ、144件（計2.5億NZドル）の申込があったが、結果として4000万NZドルが配分され、残りは非競争的に配られた。なお、2015-16年度用に7000万NZドル（Level 1-2のSAC総額の60%）が競争的配分に分類、プールされており、2014年に申込を受け付ける。このように、レベルの低い教育プログラムに対しては、ファンディングをインセンティブにした質の向上が最近強化されている。

2.4. その他

政権の産業化施策にともない、エンジニアリング教育に重点が置かれており、SACにおいて、この分野のウェイトを特に重くしている。

3. 業績ベース研究資金（Performance Based Research Fund: PBRF）の変化

⁵ 指標の定義等詳細については、水田（2012, 12）参照。

⁶ NZQF（New Zealand Qualifications Framework）によるレベル階層は、次の10段階となっている：Level 1-4（Certificates）、Level 5-6（Diploma）、Level 7（Bachelor's Degree, Graduate Diplomas and Certificates）、Level 8（Bachelor Honours Degree, Postgraduate Diplomas and Certificates）、Level 9（Master's Degree）、Level 10（Doctoral Degree）。

※参照 web サイト：<http://www.nzqa.govt.nz/studying-in-new-zealand/nzqf/understand-nz-quals/>（更新日不明・2014年5月6日参照）。

⁷ <http://www.tec.govt.nz/Funding/Fund-finder/Student-Achievement-Component/Levels-1-and-2/>（2014年2月25日更新・同年5月6日参照）。

3.1. PBRF の内容⁸

PBRF は、「研究成果の品質」(42%)「ピア評価」(9%)「研究環境への貢献」(9%)「研究学位授与数」(25%)「外部研究収入」(15%)の5つの評価(カッコ内は、評価全体に占める構成比)を研究資金配分に反映させるものであり、「研究成果の品質」「ピア評価」「研究環境への貢献」は6年に一度の品質評価に基づき、「研究学位授与数」「外部研究収入」は毎年度の実績が評価対象となる。ウェイトとしては、品質評価にもとづく部分が60%、残り2つがあわせて40%であるため、6年に一度の品質評価により、中期的な研究資金量の過半が決定される⁹。

3.2. 第3ラウンドにおける変化

PBRF は2003年に開始され、2006年に続いて2012年は3ラウンド目の品質評価が実施された。2006年の評価実施後に英国エビデンス社のジョナサン・アダムス(Jonathan Adams)がPBRF全体の制度評価に関するレポートをニュージーランド政府の依頼のもとに提出・公表しているが、2012年の評価にあたり変更された点は極小規模である。これは、2003年および2006年の評価との比較可能性を担保する意味合いが強い。

主な変化は次の2つに集約される。1つ目は、マオリ研究に対する認識を高めたことである。この分野の評価ウェイトを上げ、研究者のエビデンス・ポートフォリオ(品質評価のために個人の研究業績をまとめたもの)の提出数増加を促した。これは成功裏に推移しており、マオリ研究者のポートフォリオ提出数は、2006年評価時の2倍に達した。2つ目は、2つの専門家諮問グループが設置され、ポートフォリオのスコアリングに深く関わることになった点である。具体的には、パシフィック研究パネルと実用研究パネルが設置された。両者とも国民党政権の重点施策を反映したものであり、前者は平等化施策に依拠しており、後者は産業化施策に直結するものである。実用研究パネルは、産業界の実用的な研究に対するインパクトを、既に学問分野別に設置されている12の評価パネルに助言する役割を担う。

その他には、評価プロセスの効率化を図るために新しいITシステムが開発され、2012年の評価から導入されている(ただし、プロセス自体に大きな変化はない)。また、2011年のカンタベリー大地震の影響を考慮し、被災した研究者の評価が不利にならないように配慮している。

ちなみに、2012年の品質評価実施前にPBRFについてTECで検討されていたのは、評価単位の問題であった。これは、ジョナサン・アダムスが前述の制度評価レポートで指摘していた点である。世界各国で実施されている類似の研究評価制度と比較して、PBRFが持つ最も大きな特徴は評価単位が「研究者個人」であることであり、各研究者が研究実績をエビデンス・ポートフォリオとして提出する点にある。ただし、個人を評価単位にすると、個々人のパフォーマンスのインパクトが強くなるため、英国と同様に研究グループをベースにする案が検討されていた。しかし、過去2回の品質評価との比較可能性が損なわれるため、評価単位の変更は見送られている。

⁸ PBRFの制度設計の詳細については、水田(2012, 16-18)参照。

⁹ 後に最新情報で示すとおり、5つの評価の構成比は変更になる予定。

3.3. PBRF に関する予期せぬ結果

PBRF は、その名称に示されているとおり、ファンディング・メカニズムをもとに研究活動活性化のインセンティブを付与することにその目的があった。しかし、実際には大学等による予期せぬ利用方法や粉飾まがいの行動が見られるようになっている。

まず、大学は PBRF を政府からの資金獲得よりも、平均スコアによる名声の獲得や宣伝に使用できるようになっている。特に NZ では、オークランド大学とオタゴ大学が研究大学として同国の 1 位の座を争っており、そのゲームに PBRF の平均スコアが使われている。なお、前述のとおり PBRF は個人ベースの評価となっているため、研究者個人の研究業績が大きく影響する。そこで、評価が低いか、あるいは低いウェイトの研究分野の研究者を特殊な雇用契約で人為的に PBRF の対象から外すような例が見られるようになった。TEC としては、今後、研究者の適格性について厳密に監査する必要に迫られているとのことであった。

なお、TEC は、PBRF の平均スコアを使用した過剰な競争を避けるために、機関の平均スコアを 2012 年の評価から公表しないことに決定した。これは、機関ベースで過去 2 回の評価との比較可能性がなくなるというデメリットがあるものの、不毛な名声競争を避ける方が利点が大きいと判断されたものである。

3.4. PBRF の効果

PBRF の効果については、教育省のロジャー・スミス (Roger Smith) のチームが進めている。過去 2 回の評価ラウンド間の変化については、品質スコアの向上、研究成果の量・質にかかわる透明性の向上、研究業績の増加は如実に認められるが、業績に劣る研究者の取り扱いなどについていろいろな逸話が広まっている。また、他省庁が配分している研究資金等を含めて、NZ 全体での配分の最適化も課題となっている。

3.5. その他

PBRF は、制度設計にあたり英国の RAE (Research Assessment Exercise) と香港の研究評価をモデルにしている。ただし、英国は、ビブリオメトリクス (計量書誌学) によるインパクト評価を中心とした REF (Research Excellence Framework) に研究品質評価を変更し、2014 年中に完了する予定である (2015-16 年度より適用)。ただし、このような英国の制度変更に対して、NZ は追随しない方針である。その理由については、品質評価の対象としているエビデンス・ポートフォリオに、既にインパクトの要素が入っており、特に変更の必要性を感じていない点が大きいのことであった。

また、英国の研究品質評価は、評価でふるいにかけ、少数の優秀な研究大学に資源を集中するためのツールとして使用されているが、NZ にはもともと 8 つしか大学がないため、そうした選択と集中の必要性を感じていない点も大きい。

3.6. 追加情報 (2014 年 4 月 11 日現在)

2014 年 3 月、政府は 2013 年に実施した見直しと意見聴取の結果、PBRF に次のよう

な変更を加えることを予定していると発表した¹⁰。

- ・ PBRF の目的を明確化する。
- ・ 利用者の観点から見た研究品質向上と利用者指向の研究の実施
- ・ 取引費用¹¹の低減を図るため PBRF の品質評価を簡素化
- ・ 高等教育における研究人材の持続可能性を維持するための支援
- ・ 研究業績報告の強化

これらの変更は、次回 2018 年の品質評価で実施される予定である。

なお、政府はこれに加えて PBRF の評価項目のウェイト構成を変更する予定である。具体的には、「外部研究収入」を 15%から 20%に引き上げ、その分、6 年に 1 度の品質評価 3 項目（「研究成果の品質」「ピア評価」「研究環境への貢献」）の構成比を 60%から 55%に引き下げる案を出している。この変更については、2013 年の意見聴取に含めていなかったため、影響が大きな機関を中心に急いで打診を行い、最終案を固める方針である。

<謝辞>

まず、多忙なスケジュールの中、本稿の元となったインタビュー調査（2012 年 9 月 12 日実施）にご協力を頂いた NZ 高等教育委員会・副長官 Collin Webb 博士に感謝を申し上げたい。聞き取り内容については、録音を持ち帰り、文章に起こした上で引用・参照を行っているが、ありうべき誤謬に対する責任はすべて筆者にある。

本稿は、(独) 経済産業研究所におけるプロジェクト「財政的な統一視点（財政制約下の最適資源配分）からみた教育財政ガバナンス・システムの構築」の成果の一部であり、今回、『ニューージーランド・ノート 第 16 号』への掲載をご快諾頂いた同研究所ご厚意に、改めてお礼を申し上げたい。なお、本稿の元となったプロジェクトについては、下記の趣旨にて実施され、その最終成果については RIETI ディスカッション・ペーパー（14-J-009）として 2014 年 2 月に公表されている。そのうち、第 5 章では NZ の義務教育における一括交付金制度の紹介と評価を行っているため、あわせてご案内しておく。

「財政的な統一視点（財政制約下の最適資源配分）からみた教育財政ガバナンス・システムの構築」

活動期間 2011 年 9 月 14 日～2013 年 8 月 31 日

メンバー プロジェクトリーダー：赤井 伸郎（経済産業研究所ファカルティフェロー）

末富 芳（日本大学）

妹尾 渉（国立教育政策研究所）

水田 健輔（東北公益文科大学）

¹⁰ <http://www.tec.govt.nz/Funding/Fund-finder/Performance-Based-Research-Fund-PBRF/>（2014 年 4 月 11 日更新・同年 5 月 6 日参照）

¹¹ 一般用語ではなく経済学用語。研究者のポートフォリオ作成負荷、提出にあたっての機関での確認作業負荷、提出されたポートフォリオの確認作業負荷、評価作業負荷などを指す。

趣旨 現在、日本を取り巻く環境は、激動の時代にある。アジアでは、中国・東南アジアが急成長を遂げる一方で、巨大な政府債務と景気の低迷で、政府の財政政策は身動きが取れにくい状態にある。また、少子高齢化の進展により労働力人口は減少する中で、成熟化した日本が、将来に渡る経済成長を持続するためには、日本国民それぞれの知識レベル・生産性の引き上げが急務である。これらを踏まえると、学校教育を通じた人的資本の蓄積および、その目的に向け限られた資源を有効に活用することが不可欠となっている。これらを実現するためには、説明責任・透明性を持った教育ガバナンス・システムの下で、国の責任を明確にするとともに、効果的・効率的・公平な教育財政制度（財政制約下の最適資源配分）を設計することが、最重要である。そこで、本研究プロジェクトでは、経済成長を促す人的資本構築のための公教育負担の在り方として、財政的な統一視点から教育段階を超えた効果的資源配分の在り方を探り、教育財政ガバナンス・システムの構築に向けた政策提言を行うことを目的とする。

<参考文献>

- 水田健輔 2007, 「ニュージーランドにおける高等教育ファンディングの改革ー比較評価の視点から見た改革のデザインと日本への示唆ー」『大学財務経営研究』, 第4号, pp.35-74.
- 2011, 「ニュージーランドにおける大学等への政府助成制度ー需要重視政策から需要管理・成果主義政策への転換ー」『ニュージーランド・ノート』, 第13号, pp.1-29.

【研究報告】

カンタベリー地震の復興行政 ～復興戦略・復興計画を中心とした 2013 年中の動向～

和田 明子（東北公益文科大学教授）

はじめに

2011 年 2 月 22 日のカンタベリー大地震から 3 年が経過した。復興行政を推進するため同年 4 月 18 日に施行されたカンタベリー地震復興法（Canterbury Earthquake Recovery Act、以下「復興法」という）は施行から 5 年で廃止されることになっており、本稿執筆中の現在、カンタベリー地震の復興行政は折り返し地点を過ぎたと言える。

筆者はこれまで復興法とカンタベリー地震復興庁（Canterbury Earthquake Recovery Authority : CERA、以下「復興庁」という）、それに復興庁が復興法に基づき策定した復興戦略（Recovery Strategy）とクライストチャーチ市が復興法に基づき策定したクライストチャーチ中心部復興計画（Recovery Plan for CBD）を中心とした復興行政の展開を、2011 年と 2012 年に分けて整理してきた（和田, 2012 ; 和田, 2013）。本稿は、復興戦略、そしてクライストチャーチ中心部復興計画を初めとする各種復興計画を巡る動きを中心に 2013 年中の復興行政の主な内容を整理するものである。

過年とは異なる 2013 年中の復興行政の一つの特徴は、戦略や計画の立案・実施だけでなく、実施された戦略・計画の評価が本格的に開始されたことである。そこで、以下では「計画の立案・実施」と「評価」に分けて、2013 年中の動向を整理することとする。

1. 計画の立案・実施

表 1 は、発災から 2013 年までの復興法・復興庁・復興戦略・各種復興計画を巡る主な動向をまとめたものである。

2010 年 9 月 4 日に発生した本震の最大余震であった 2011 年 2 月 22 日の大地震を受け、政府は同年 3 月に復興庁を創設した¹。また 4 月には復興法を制定し、復興戦略と各種復興計画の策定を規定した（同法第 11 条～第 26 条）。復興戦略は、各分野で策定される様々な復興計画の見取り図を示すとともに全体としてのビジョン・目標・原則等を定めるもので、復興庁チーフ・エグゼクティブが関係機関に協議しながら策定し復興大臣の助言に基づき総督（Governor-General）が承認する。各種復興計画は、各分野の担当機関が策定し復興大臣が承認する計画であり、復興戦略と整合性をとって策定されなければならない。各種復興計画の中でも、クライストチャーチ中心部復興計画の策定は復興法に明記された（同

¹ 省庁の新設は、設置法を要さず政令で行える（State Sector Act 第 30A 条）。

法第 17 条)。復興戦略は 2011 年 9 月に原案が公表され 2012 年 5 月に承認された。また、クライストチャーチ中心部復興計画は 2011 年 8 月に原案が公表され、2011 年 12 月の復興大臣への提出を経て、2012 年 7 月に最終承認された。

表 1 「復興行政」年表

	立案・実施	評価
2010 年		
9 月 4 日	本震 (M7.1)	
9 月 6 日	復興大臣の任命	
9 月 14 日	カンタベリー地震復旧・復興法成立	
2011 年		
2 月 22 日	最大余震 (M6.3)	
3 月 29 日	復興庁創設	
4 月 12 日	カンタベリー地震復興法成立 (旧法廃止)	
8 月 16 日	クライストチャーチ中心部復興計画原案公表	
9 月 10 日	復興戦略原案公表	
12 月 21 日	クライストチャーチ中心部復興計画最終案の議決及び復興大臣への提出	
2012 年		
4 月 18 日	復興庁内にクライストチャーチ中心部開発ユニット創設	
5 月 31 日	復興戦略の総督承認	
7 月 30 日	クライストチャーチ中心部復興計画の復興大臣承認	
10 月		「カンタベリー住民意識調査」結果公表 (第 1 回)
2013 年		
3 月		「主要指標の達成度」公表 (第 1 回)
6 月	クライストチャーチ中心部復興計画の財源に関する政府・クライストチャーチ市間合意 クライストチャーチ中心部立入禁止区域の全解除	復興戦略の「モニタリング計画」の公表 「カンタベリー住民意識調査」結果公表 (第 2 回) 「カンタベリー生活状態指標」公表 (第 1 回)
11 月		「カンタベリー住民意識調査」結果公表 (第 3 回)
12 月	土地利用復興計画の復興大臣承認	「カンタベリー生活状態指標」公表 (第 2 回)

(資料) 和田 (2013) 「カンタベリー地震の復興行政と公的部門改革～2012 年の動向を中心に～」の表 1 に 2013 年中の出来事を加筆。

以上の復興戦略や復興計画の立案・実施に係る 2013 年中の動きとして、まず 6 月 26 日

にクライストチャーチ中心部復興計画の財源負担について政府とクライストチャーチ市が合意した (CERA, 2013a, p.8)。クライストチャーチ中心部復興計画の最終案は 2011 年 12 月に復興大臣に提出されたが、翌年 4 月 18 日に復興大臣は最終案の一部を承認した上でさらに実現可能な詳細計画 (blue print) を 100 日以内に策定するための新組織 (Christchurch Central Development Unit: CCDU) を復興庁内に立ち上げることを表明した²。新組織は、復興庁職員だけでなく、クライストチャーチ市職員、カンタベリー広域自治体職員、それに計画の策定・実施に携わる民間企業職員等から構成され、関係機関が組織横断的に連携・協働してクライストチャーチ中心部の復興を進めることとされた³。また、今回の一部承認は最終案に盛り込まれた全てのプロジェクトの財源を保障するものではないことも確認された⁴。クライストチャーチ市が復興大臣に提出した最終案は付録 (Appendix) 等を含め全 5 巻・1000 ページを超す内容であったが、2012 年 7 月 30 日に復興大臣が最終承認したクライストチャーチ中心部復興計画は、全 1 巻・108 ページのコンパクトなものであった。

ニュージーランドの地方自治体が平時に地方自治法 (Local Government Act) に基づき策定する年次計画 (annual plan) や長期計画 (long-term plan) は、大臣承認を必要としていない。これは、ニュージーランドの地方自治体の財源は約 87%が自主財源であり

(Statistics New Zealand, 2010, p.54)、国の財源に依存せずに計画を策定・実施することができることに対応している。一方、復興計画は大臣承認を要することが復興法に規定されたのは、復興計画の実施には多額の国費が必要となることが想定されたためと考えられる。

以上のことから、クライストチャーチ中心部復興計画の承認過程は、クライストチャーチ市が提出した復興計画最終案の実現可能性を財源の観点から疑問視した政府が、「組織横断的連携・協働」を名目に計画策定に介入し実現可能な計画に作り変えたものであると解釈することもできる。総額 48 億ニュージーランド・ドルのうち、29 億ニュージーランド・ドルを政府が、19 億ニュージーランド・ドルをクライストチャーチ市が負担することが合意された (CERA, 2013a, p.8)。

2013 年 6 月 30 日には、2011 年 2 月 22 日以降設けられていたクライストチャーチ中心部の立入禁止区域 (cordon) が全て解除された (CERA, 2013a, p.8)。立入禁止区域は危険な建築物の取り壊しや補修が進み安全性が確保されるのに伴い少しずつ狭められてきたが、

² The Press 「Gerry Brownlee's speech」

(<http://www.stuff.co.nz/the-press/news/Christchurch-earthquake-2011/6764102>)
(2012 年 4 月 18 日アクセス)

³ Stuff 「100-day action plan for Christchurch rebuild」

(<http://www.stuff.co.nz/national/politics/6762210/100-day-action-plan-for-Christchurch-rebuild>) (2012 年 4 月 18 日アクセス) ; CCDU 「FAQs-The Blueprint 100 Consortium」
(<http://ccdu.govt.nz/faq/the-blueprint-100-consortium>) (2012 年 10 月 23 日アクセス)

⁴ The Press 「Gerry Brownlee's speech」

(<http://www.stuff.co.nz/the-press/news/Christchurch-earthquake-2011/6764102>)
(2012 年 4 月 18 日アクセス)

区域設定から2年以上を経てようやく全廃された。発災前には多くの人が働き、また余暇を楽しむ場であった市中心部に平常通りアクセスできるようになったことは、最大の被災地であったクライストチャーチ市の復興を象徴する出来事であったと言える。クライストチャーチ中心部復興計画に盛り込まれた主要プロジェクトのいくつかも2013年中に着工しその一部が完成している（CERA, 2013a, p.4; CERA, 2013g, p.4）。2013年はまさに『取り壊し（deconstruction）』から『再建・復興（reconstruction）』へのターニングポイントであった」（CERA, 2013a, p.8）ととらえることができる。

既述したように、クライストチャーチ中心部復興計画だけでなく必要に応じて各種復興計画を策定できることを復興法は定めているが、2013年現在では20以上の復興計画（あるいは復興プログラム）が策定もしくは実施中である（CERA, 2013a, p.6; CERA, 2013g, p.6）。たとえば、2013年12月には土地利用復興計画（Land Use Recovery Plan）が復興大臣の最終承認を受け策定された。これは、先に策定されていたクライストチャーチ中心部復興計画の対象地域以外を対象とする土地利用計画である。カンタベリー広域自治体が、クライストチャーチ市を含む被災3基礎自治体、復興庁等の関係機関と協議しながら策定した。その過程では、クライストチャーチ中心部復興計画と同様に、ワークショップやオープンフォーラム、書面による意見提出などの公聴の機会も設けられた（CERA, 2013e）。

2. 評価

発災から3年となる2013年は、復興戦略や復興計画の実施後の評価が本格的に開始された年でもあった。まず、復興戦略の「モニタリング計画」（Greater Christchurch Earthquake Recovery Monitoring and Reporting Plan）が2013年6月⁵に公表された。復興戦略では、①「リーダーシップと統合（leadership and integration）」「経済的復興（economic recovery）」「社会的復興（social recovery）」「文化的復興（cultural recovery）」「建築物の復興（built environment recovery）」「自然環境の復興（natural environment recovery）」という復興戦略の6分野⁶毎に設定される主要指標（headline indicators）の達成度、②各種復興計画や復興プログラムにおける目標の達成度、③政府と地方自治体による財務報告、の3つの側面から評価を行うことになっていた（CERA, 2012a, p.17; CERA, 2013d, p.7）。「モニタリング計画」では①の主要指標が具体的に示されるとともに、①②③に対応して行われる様々な評価の全体見取り図が示された。

①の主要指標は、復興の進捗度を測る最重要指標として復興庁が関係機関と協議し数多ある指標の中から設定したもので、「モニタリング計画」の公表に先立つ2013年3月に初

⁵ 復興戦略では2012年6月までに策定されることになっていた（CERA, 2012a, p.17）が、1年遅れた。

⁶ 復興戦略原案では「文化的復興」が「社会的復興」に包含され5分野とされた。

めて達成度が公表された⁷。②の各種復興計画・復興プログラムにおける目標の達成度は、当該計画・プログラムの担当機関がそれぞれ行う。③の財務報告は各省庁・地方自治体の作成する年次報告（annual report）などで行われる。

①の主要指標以外にも、復興庁は様々な指標・データを公表しているが、このうち主に社会的復興分野の達成度を詳しくモニタリングするために公表されているのが「カンタベリー生活状態指標（Canterbury Wellbeing Index）」と「カンタベリー住民意識調査（Canterbury Wellbeing Survey）」である⁸。

「カンタベリー生活状態指標」は社会的復興に関わる各種指標を16の分野毎に収集し公表するものである（表2参照）。指標は、分野毎に複数示されている。それらは関係機関がもともと使用していた既存指標であるので、発災前との比較（時系列）、あるいは他地域との比較（クロスセクション）ができるようになっている。「カンタベリー生活状態指標」は半年に1度更新（update）されることになっており、2013年6月に初めて公表され、本稿執筆中の現在までに1度更新された。

表2 カンタベリー生活状態指標の16分野

- 知識・スキル（Knowledge and skills）
 - ①教育への参加（Participation in education）
 - ②教育到達度（レベル2の合格率）（Educational achievement : NCEA Level 2 pass rate）
- 経済状態（Economic wellbeing）
 - ③雇用（Employment outcomes）
 - ④家計収入（Household income）
- 住宅（Housing）
 - ⑤住宅（Housing affordability and availability）
- 健康
 - ⑥健康状態と医療サービスへのアクセス（Keeping well and having access to health services）
 - ⑦精神的な健康状態（Mental wellbeing）
 - ⑧健康状態に悪影響を与えるリスク要因（Risk Factors）
- 安心・安全（Safety）
 - ⑨犯罪（Offending patterns）
 - ⑩児童虐待（Child abuse and neglect）

⁷ 主要指標の達成度は3か月に1度公表されることになっているが、本稿執筆中の現在、復興庁ウェブサイトでは2013年3月の1度しか公表されていない。

⁸ そのほか復興庁が定期的に公表している指標として、経済的復興の達成度を測る「カンタベリー経済指標（Canterbury Economic Indicators）」などがある。

- 社会とのつながり (Social connections)
 - ⑪芸術への参加 (People participate in and attend the arts)
 - ⑫スポーツへの参加 (Sports participation)
 - ⑬自主防災の準備 (Households are prepared for civil defence emergencies)
 - ⑭社会とのつながり (Social connectedness)
- 市民参加 (Civil participation)
 - ⑮意思決定過程への参加 (Civil participation)
- 人口 (People)
 - ⑯人口 (Population)

(注) 16の分野毎に複数の指標が示される。

(資料) Canterbury Earthquake Recovery Authority (2013) *Canterbury Wellbeing Index June 2013*

「カンタベリー住民意識調査」は、「カンタベリー生活状態指標」を補完するため実施されている住民アンケート調査である。被災3基礎自治体の有権者(=18歳以上)から無作為抽出した約2400人が対象で、被災していない住民も対象とされる(CERA, 2013i, p.4)。半年に1度実施されることになっており、本稿執筆中の現在までに2012年10月、2013年6月、2013年11月の3度調査結果が公表されている。計3回の調査では、

- ・クライストチャーチ市では、他の2町に比べ、生活の質が良いと答えた住民の割合が低い、
 - ・日常生活に悪影響を与えているものは、第一に地震保険の手続き、第二に被災した住宅に関する決断(補修か移転か)、第三に公共工事の多さなど劣悪な環境に置かれていること、である、
 - ・逆に良い影響として、第一に命・生活に対する新たな感謝の念がわいたこと、第二に家族と一緒に過ごす時間が増加したこと、第三に困難な状況でも対処できたという誇りを持ったこと、がある、
 - ・復興庁や地方自治体が行う意思決定については「信頼している」人と「していない」人が両極化しており「わからない(どちらとも言えない)」という人も多い、
- 点など、いくつかの変わらぬ傾向も確認されている(CERA, 2012b; CERA, 2013h; CERA, 2013i)。

なお、18歳以上を対象とする同調査を補完し地域の将来を担う若者の意識も調査するため、12歳~24歳を対象とした住民意識調査が2013年中に初めて実施された⁹。本稿執筆中

⁹ CERA「Youth Wellbeing Survey」(<http://cera.govt.nz/youth-wellbeing-survey>) (2014年3月22日アクセス)。

の現在、結果は未公表である。

3. 結びに代えて

本稿では、復興戦略と復興計画を中心とした 2013 年中の復興行政の動向を「計画の立案・実施」と「評価」の 2 つの側面に分けて整理してきた。2013 年は復興行政に対する「評価」が本格的に開始された年と位置づけられ、翌 2014 年はニュージーランドの総選挙の年となっている。発災後の 2011 年 11 月の総選挙で勝利し政権 2 期目に入ったキー国民党政権は、「4 つの優先事項 (Government's four priorities)」を掲げて政策を推進してきた (表 3 参照)。その優先事項の一つが「クライストチャーチの再建 (rebuild Christchurch)」であり、2014 年 9 月 20 日に予定される総選挙ではその成果が問われることになる。

表 3 キー政権 2 期目の「4 つの優先事項」

- ・ 責任ある財政運営 (responsibly manage the Government's finances)
- ・ 競争力・生産性の高い経済の構築 (build a more competitive & productive economy)
- ・ より良い公共サービスの提供 (deliver better public services)
- ・ クライストチャーチの再建 (rebuild Christchurch)

(資料) John Key 「Key Notes: Outlining the Government's Priorities」

(<http://johnkey.co.nz/archives/1396-Key-Notes-Outlining-the-Governments-priorities>)

(2013 年 4 月 9 日アクセス)

以上みてきたニュージーランドの復興行政の内容をさらに調査・分析した上で日本の復興行政に対する示唆を得ることは、ニュージーランド研究の喫緊の課題であると筆者は考える。東日本大震災に関する社会科学分野の調査研究は近年続々と刊行されているが、同時期に大地震を経験し復興行政が展開されているニュージーランドの状況を分析し日本への示唆を得ようとする社会科学調査研究は管見の限りほとんど見当たらない¹⁰。本稿は、そのための基本資料を整理し提供することを目的とした小稿である。

¹⁰ CiNii (国立情報学研究所論文情報ナビゲータ) で「カンタベリー地震」で検索した結果 (2014 年 3 月 22 日)。

<参考文献>

- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2011) *Draft Recovery Strategy for Greater Christchurch* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2012a) *Recovery Strategy for Greater Christchurch* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2012b) *Wellbeing Survey 2012* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013a) *Annual Report 2013* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013b) *Canterbury Wellbeing Index June 2013* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013c) *Canterbury Wellbeing Index December 2013* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013d) *Greater Christchurch Earthquake Recovery Monitoring and Reporting Plan* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013e) *Land Use Recovery Plan* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013f) *Recovery Progress in Greater Christchurch: Quarterly Update for the Three Months ended 31 March 2013* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013g) *Statement of Intent 2013-2016* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013h) *Wellbeing Survey April 2013* Christchurch.
- Canterbury Earthquake Recovery Authority (CERA) (2013i) *Wellbeing Survey September 2013* Christchurch.
- Christchurch City Council (2011) *Draft Central City Recovery Plan For Ministerial Approval December 2011* Christchurch.
- Christchurch City Council (2012) *Christchurch Central Recovery Plan* Christchurch
- Statistics New Zealand (2010) *New Zealand Official Yearbook 2010* Wellington.
- 和田明子 (2012) 「地震災害に対するニュージーランド政府及び地方自治体の対応ー復興法・復興庁・復興計画を中心にー」『ニュージーランド・ノート』第 14 号、pp.30-44
- 和田明子 (2013) 「カンタベリー地震の復興行政と公的部門改革～2012 年の動向を中心に a～」『ニュージーランド・ノート』第 15 号、pp.27-38

【研究報告】

マオリ神話の昔話性について

橘 日出来（日本 NZ 学会）

1. はじめに

マオリ神話とは、ニュージーランドの先住民マオリ族にかかわる神話である。もともとマオリ族は東ポリネシア（現在のタヒチ周辺）に居住していたポリネシア人の一部族であって、西暦 800 年以降にニュージーランドへ移住し、定住した人々であると伝えられている（Sinclair 1982、J.Davidson 1984、K.R.Howe 2003、他）。

このマオリ人には、その資質にふさわしい一つの神話体系があり、とりわけ天地創造の神話は、その美しさにおいて旧約聖書の「創世記」に匹敵するとされている（Alpers 1982）。また彼らには部族間の戦争を記録した事実と伝説との相半ばする壮烈な部族史譚やはるばる南太平洋を漕ぎ渡った英雄叙事詩的な物語の宝庫がある（前掲書）。

これらの神話・伝説は主としてニュージーランド総督ジョージ・グレイ卿により収集され、これが 1855 年に『ポリネシアの神話』としてロンドンで最初に刊行された。

その後、100 年以上経過した 1982 年に、アントニー・アルパーズによるマオリの神話および伝説が集大成された「マオリ神話」が刊行された。

その内容は「混沌、洪水、女性の創造」などの神話の普遍的要素および「マオリのカヌー伝説」からなっている（Alpers 1982）。これらのマオリ族の神話・伝説は、それ自体が文芸的に興味深いものであるが、同時に、そこに現れる世界観、自然観、宗教観・倫理観、社会組織、経済生活、行動範囲、技術体系などは大いに考究に値するものである（由比浜、1996）。

いずれにせよ、このマオリ神話や伝説がマオリ族の歴史を物語るばかりでなく、彼らの文化的背景を形成し、精神的支えとなっていることは確かである。

2. 本稿の主旨

本稿はマオリ神話のうち「マウイ火をもてあそぶ」という話を昔話に見立てて、ロシアのフォルマリズム民俗学者ウラジーミル・プロップの「昔話の形態学（翻訳版 1991）」の登場人物の機能と対照し、プロップ理論をマオリ神話に適用し、マオリ神話の昔話性について考察するものである。

3. プロップの登場人物の機能

プロップはその著「昔話の形態学」の中で、昔話の登場人物の機能について次のように言及している。

1) 昔話の恒常的な不変の要素となっているのは、登場人物たちの機能である。その際、こ

これらの機能がどの人物によって、またどのような仕方で実現されるかは関与性を持たない。これらの機能が昔話の根本的な構成部分である。

2) 魔法昔話に認められる機能の数は、限られている。このような前提で、彼は昔話の登場人物について 31 個の機能に分類した。もちろん、あらゆる昔話が 31 個の機能をすべて備えているということはまったくない。

4. これらの機能を列挙すると、次のとおりである。

- | | | | | |
|-----------------|--------------|--------------|---------|--------|
| 1) 留守 | 2) 禁止 | 3) 違反 | 4) 探り出し | |
| 5) 情報漏洩 | 6) 謀略 | 7) 幫助 | 8) 加害 | |
| 8) - a 欠如 | 9) 仲介 | 10) 対抗開始 | 11) 出立 | |
| 12) 贈与者の第一機能 | 13) 主人公の反応 | 14) 呪具の贈与・獲得 | | |
| 15) 二つの国の間の空間移動 | 16) 闘い | 17) 標づけ | 18) 勝利 | |
| 19) 不幸・欠如の解消 | 20) 帰還 | 21) 追跡 | | |
| 22) 救助 | 23) 気付かれざる到着 | 24) 不当な要求 | 25) 難題 | 26) 解決 |
| 27) 発見・認知 | 28) 正体露見 | 29) 変身 | | |
| 30) 処罰 | 31) 結婚 | | | |

・機能の継起順序は常に同一である。

・あらゆる魔法昔話が、その構造の点では単一の類型に属する。ただし、これらの機能のすべてが個々の話に出てくるわけではない。そのうち不可欠の機能は「加害または欠如」である。

5. 「マウイ火をもてあそぶ」へのプロップの機能の適用

- 1) マウイは村中の火を消してしまう（違反）
- 2) 火がなくなる（欠如）
- 3) 老曾長たちは、召使たちにマファイカ（火の所有者）の所へ行って、火を取ってくるように命じたが拒否された（難題）。それで、マウイがこの難題を引き受ける。
- 4) 母親がマウイにマファイカの所へ行く道を教える（幫助）
- 5) マウイ火を取りに行く（出立）
- 6) 母親はマウイに、魔法を仕掛けてはいけないと言う（禁止）
- 7) マウイは女神マファイカの所に到着する（二つの国の間の空間移動）
- 8) マウイは女神マファイカに火のありかを尋ねる（探り出し）
- 9) マファイカはマウイに尋問する（贈与者の第一機能）
- 10) マファイカはマウイに火のありかを教える（発見・認知）

- 11) マファイカは自分の指を抜いて火をマウイに与える (呪具の贈与・獲得)
- 12) マウイは次々にマファイカの指を抜かせる (謀略・不当な要求)
- 13) マファイカは火をマウイに渡さないで、地面に投げ付けると、あたり一面が火の海となる (加害)
- 14) マウイは鷹に変身して炎の上に舞い上がる (変身)
- 15) 炎はマウイを執拗に追いかけてきた (追跡)
- 16) マウイの祖神タフィリは雨を降らせて、火を消した (救助)
- 17) 火種はマホエ、トタラ、カイコマコなどの木々に貯えられ、爾後その木を摩擦することにより、火を得ることができた (不幸・欠如の解消)
- 18) マウイは村に戻ってきた (帰還)
- 19) 両親はマウイがマファイカをからかっただけではいけないという忠告を無視したことを叱った (違反、処罰)
- 20) マウイは両親に逆らった (対抗開始)
- 21) マウイはいかなる火も村に持ち帰らなかった (欠如)
- 22) マウイは新たな冒険に加わってくれる仲間を探しにでかけた (出立・留守)

6. マオリ神話の昔話性の考察

1) プロットの理論がかなり適用できる

・この小編の話の中に、プロットの31の登場人物の機能のうち大部分の機能が表出されている

・不可欠の機能である「加害」、「欠如」も出ている。ただし、機能の継起順序はプロットのものとは異なる。

以上の考察からマオリ神話は昔話としての要件を満たしていると考えられる。

2) 神話と昔話との関係。

・レビー・ストロース：神話と昔話の一つのものの両面である。神話是对立（生と死、天と地、光と闇）が民話より強い。

・プロット：神話と昔話はその形式においてではなく、その機能において異なるのである。神話から昔話が展開した。

・伊藤清司：昔話は神話や古い信仰から発生した。

・柳田国男：昔話は神話のひこばえである。

・福田晃：民間説話に民間神話を加えて論及すべきこととなる。

・マオリ神話は「天地創造」を除いては、移住伝説や英雄伝説が多い。いわゆる民話の部分が多い。

・マウイは半神半人である。

・〈何かを手に入れたいという願望〉が一貫したモチーフである。

プロップによると、例えば、王が息子に火の鳥をとりに行かせる。主人公が呪術的手段を与えられて、家を出る。主人公が贈与者または求める物を見つけだすのを手伝ってもらえる。援助者との出会い、敵との決闘、帰還、追跡。その間における試練—結婚という図式である。「マウイ火をもてあそぶ」の場合、結婚ということを除いては、まさしくプロップの言う図式があてはまる。この点に関して、マウイの物語は魔法昔話であると言えることができるであろう。

- ・マオリ神話（マウイにかかわる部分）は、昔話の必要・十分条件を満たしている（「むかしむかし」で始まることなど）の要件を満たしている。「桃太郎」、「浦島太郎」が昔話であるように。

- ・マオリ神話は時代、場所が明示されていないし、信ずることも要求されていないので、伝説とは言い難い。やはり、「一寸法師」のように昔話とされても良いのであろう。

6. まとめ

マオリ神話は完全な意味での神話ではない。マウイは半人半神であるし、活動場所も天界でもない。敢えて言えば、文化起源神話と言えないことはない。

また、神話とは民衆がその現実性を信じている神、あるいは神的存在にかかわる話である（プロップ、1983）。そうであれば、マウイに関して神という表現は見当たらない。いわゆる、トリックスターとしてのマウイの認識が一般的である。したがって、マウイにかかわる話は神話とは言い難い。

神話と昔話の区別に関して、プロップは次のように言及している。形式上で神話と昔話を区別することはできない。昔話と神話は時として、完全に一致するため、民俗学や口承文芸学においては、このような神話を昔話と呼ぶことがしばしばある。

まさしく、マオリ神話（マウイにかかわる部分）はこのことに該当する故に、昔話とも呼ぶことができると考える。

7. おわりに

本稿ではマオリ神話のうち「マウイ火をもてあそぶ」だけを取り上げたのであるが、「マウイ太陽の動きを遅らせる」等、他の話についてもプロップの「昔話の形態学」の登場人物の機能と対照し、マオリ神話の昔話性について更なる検証を試みることを今後の課題としたい。

参考：

神話・民話・伝説・昔話に関する諸説

同じような題材が語られる場合でも、神話、民話、伝説、おとぎ話、昔話、童話などの用語が使われている。例えば、「浦島太郎」や「桃太郎」の話にしても、神話とは言わないまでも、「浦島伝説の研究」(阪口保、新元社(1955))、「英雄伝説桃太郎新論」高木俊夫、平凡社(1974)のように伝説として取り扱われる場合がある。もちろん「浦島太郎」や「桃太郎」がおとぎ話であり、昔話であり、童話であることには異論はないであろう。

ここで、これら用語の定義について簡単に言及することとする。

- ・小沢俊夫(1998)：神話と民話について、神話は神様の行状を語るものであり、民話は人間達の行状を語るもの。
- ・関敬吾：「日本昔話集成」(角川書店、1950～1958)："folktale"を民話と訳した。もちろん、この中には伝説や昔話が含まれている。
- ・小沢俊夫(1998)：柳田国男は民話ではなく、「口承文芸」という学術用語を使用している。これに含まれるものとして諺、なぞなぞ、民謡、伝説、昔話、世間話、笑い話などがある。
- ・宮田登(1993)：「神話は古代社会に属するのに対して、伝説は後世の人々が前代からの語り伝えや信仰・祭儀について解釈した内容」としている。：神話の概念はそれほど明確でなく広く伝説や昔話を包括することができる。
- ・伊東清司(1993)：神話と伝説とはその語られている対象が遙久の原古か、それ以外かで区分される。
- ・小沢俊夫(1998)：伝説と昔話の差異について、「伝説は時代・場所・人物が特定のものであるのに、昔話は時代・場所・人物が不特定である。また、伝説の場合には語られている事柄が信じられることを求めているのに対して、昔話は内容を信ずることを求めている。
- ・大林太良(1966)：ストックホルム大学のフルトクランツ教授は「説話を神話・伝説・昔話に分けている」。
- ・福田晃(1989)：民間説話は伝説・昔話・世間話を総括する・・・それに民間神話を加え、語り物をも便宜的に含めて論及すべきこととなる。
- ・本田義宏(1991)：説話は文学ジャンル(今昔物語集、宇治拾遺物語等)であり。教説、説法である。

主要参考文献

- アールネ＝トムソン 1951. 『昔話の型』.
- 荒木博之編 1994. 『フォークロアの理論』, 法政大学出版会.
- アントニー・アルパーズ 1982. 『マオリ神話』, サイマル出版会.
- 伊藤清司 1991. 『昔話・伝説の系譜』, 第一書房.
- 大林太良 1966. 『神話学入門』, 中公新書.
- 小沢俊夫 1998. 『昔話入門』, ぎょうせい.
- キース・シンクレア 1984. 『ニュージーランド史』, 評論社.
- 関 敬吾 1950～58. 『日本昔話集成』, 角川書店.
- ダンダス、池上嘉彦訳 1980. 『民話の構造』, 大修館書店.
- 日本記号学会編 1985. 『語りー文化のナラトロジー』, 記号学研究6, 東海大学出版会.
- 大塚民俗学会編 1994. 『日本民俗事典』, 広文社.
- ウラジミール・プロップ 斉藤君子訳 1983. 『魔法昔話の起源』, せりか書房.
- ―――、北岡誠司、他訳 1991. 『昔話の形態学』, 水声社.
- 福田晃 1989. 『民間説話』, 世界思想社.
- 本田義宏 1991. 『説話とは何か』, 勉誠社.
- マックス・リュテイ 1969. 『ヨーロッパの昔話ーその形式と本質』, 岩崎美術社.
- 柳田国男 1947. 『口承文芸史考』, 定本6巻、筑摩書房.
- ――― 1931. 「世間話の研究」、定本7巻、筑摩書房.
- 柳田国男監修 1948. 『日本昔話名彙』, 日本放送出版協会.
- 由比浜省吾訳 1996. 『マオリ神話と伝説』, 由比浜省吾 (私本).

【ニュージーランド滞在記】

オークランド（ニュージーランド）での古書店巡り

山岡 道男（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授
オークランド大学ニュージーランド・アジア研究所 訪問学者
日本ニュージーランド学会 元会長）

オークランドでの古書店巡りの第1日目（2013年6月1日：土曜日）

現在、戦前期に中国へ留学し、戦中期は日本軍の捕虜となっていたニュージーランド人について論文を作成している。関連する文献を日本から船便で3冊（英文1冊と邦訳2冊）を送ったが、執筆していて関連資料が欲しくなり、古書店を見て回ることにした。

オークランドに着くと直ぐに行く古書店は、町の中心街の一角で、ブティックが多いハイ・ストリート（**High Street**）にある1軒である。この**Rare Books**と言う古書店（3日目に訪問）は有名で、以前は地下にあったが、今は4階に移動し、水曜日と木曜日の午前9時半から午後2時までの時間帯しか開いていない。女主人とも顔見知りで、今回も1度挨拶に行ったが、以前は、オークランド到着日にこの書店へ行き、書籍を大量に購入して日本に送ってもらったこともあった。

街中には、本日の古書店巡りの3番目に行った、**Jason Books**と言う古書店がある。以前は、中心街のクイーン・ストリート（**Queen Street**）の中間地点にある新刊書店である、ウィットコウルズ（**Whitcoulls**）の近くのビルの2階に店舗はあったが、今は、**Rare Books**の近くに移転して開業している。

フェリーボートで10分程渡ると、オークランドの観光地の1つであるデボンポート（**Devonport**）に着く。ここには、唯一のメイン・ストリートであるビクトリア・ロード（**Victoria Road**）に沿って、以前は2軒の古書店が、かなり近接してあったが、その内の1軒（**Devonport Vintage Bookshop**）は最近閉店したので、現在は、船着き場から徒歩で1分の距離にある**Evergreen Books**の1軒しか開いていない。しかし、船着き場内の小さなアーケード街に、古書を扱っている書店（3日目に訪問）があり、最近は、歩道の両側に古書を並べて置いてある。

昨日（6月1日）の午前中に車で行ったのは、オークランドの1つの繁華街地区であるボンソンバイ（**Ponsonby**）にある**Classics and Suchike Books**と言う名の古書店である。大学へ行く前に、この古書店を探しながら行くと、その近くで駐車することが出来たが、まだ9時半だったので、開店時間の10時まで、車を駐車した横のスーパーで、野菜・卵・パンなどを購入して車に積みこんでいると開店間近になり、5分程前に行くと既に開いていた。女性の店主に迎えられ、欲しかった書籍（一番最初の書籍）を1冊見つけた。そこでは、4

冊を購入し、58 ドルを支払った。

- (01) *Dance of the Peacocks: New Zealanders in Exile in the Time of Hitler and Mao Tse-Tung*, James McNeish, Vintage, 2003, 16 ドル
- (02) *He Tipua: The Life and Times of Sir Apirana Ngata*, Ranginui Walker, Penguin Books, 2001, 14 ドル
- (03) *Spy: A Former SIS Officer Unmasks New Zealand's Sensational Cold War Spy Affair*, C.H. (Kit) Bennetts, Random House, 2006, 12 ドル
- (04) *New Zealand The Story So Far: A Short History*, Edmund Bohan, Harper Collins, 1997, 16 ドル

書籍の代金を支払っている間に支払棚の横を見ると、パンフレットを開くと鳥の鳴き声を聞けるシリーズの冊子が陳列してあったので、その中の1つのツイ (Tui) の鳴き声がするものを追加購入すると、古書店の女主人は、親切にもプレゼントとして無料でくれるとのことであった。ちょうど、ツイ (鳥とビール) に関してエッセイを執筆中であったので、いいタイミングであった。

1 時間程、古書店にいた後に大学へ行き、車を地下駐車場に置き、研究室でメールのチェックをした後に、今度は2つ目の古書店を目指した。これは、徒歩で10分程にある通称ケイ・ロード (正式名は非常に長い、Karangahape) にある古書店に行ったが、ニュージーランドの歴史の書籍は1冊しかなく、たいしたものはない。このケイ・ロードは、クイーン・ストリートの丘側にあるので、赤い色のシティ・リンク (City Link) と言う、クイーン・ストリート沿いの街中の主要な観光スポットを巡回しているバスに、0.5 ドルで乗り、街の中心部まで降りて行った。お腹が空いたので、ステーキハウスに入り、昼定食のステーキを16ドルで食べて元気を出した。

次に、先に紹介した、3番目の Jason Books へ行った。ここでも約1時間にわたり古書を見て回り、下記の5冊を見つけ、合計金額は113ドルであったが、13ドル安くしてもらって、切りの良い100ドルで購入した。

- (05) *The Penguin History of New Zealand*, Michael King, Vintage, 2003, 15 ドル
- (06) *The Shadow of A War: A New Zealander in the Far East 1939-1946*, James Bertram, Whitcombe & Tombs, 1947, 40 ドル
- (07) *Savage's Account of New Zealand in 1805*, A. D. McKinlay, L. T. Watkins, 1939, 40 ドル,
- (08) *The Hawke's Bay Earthquake: New Zealand's Greatest National Disaster*, Robert McGregor, Art Deco Trust, 1998, 8 ドル
- (09) *The History of the Japan-New Zealand Business Council 1974-2000*,

Esme Marris, Japan-New Zealand Business Council, 2002, 15 ドル

論文の中で取り扱っているニュージーランド人とは、上記の書籍の 2 冊目の著者であるジェームズ・B・バートラム (James B. Bertram : 1910-1993) である。彼はニュージーランドで高等学校を終えて、現在私の滞在先であるオークランド大学へ入学し、そこで英文学を専攻したが、1932年にジャーナリズムで学士号を取得し、ローズ奨学金を得てイギリスのオックスフォード大学へ行き、1935年に卒業した。その後、同年末の25歳の時に、ローズ信託基金より1年間の留学資金を得て中国へ留学し、燕京大学で中国語を勉強した。その間に、蒋介石が幽閉されるという西安事件が起こり、取材目的で、北京から11日間をかけて西安へたどり着き、事件直後の状況取材した。そこでの事件内容と分析を、個人的なレポートとして書籍(*Crisis in China, The Story of the Sian Mutiny*, 1937)で出版し、その翻訳本が戦後になって日本で出版されている。その訳本の2冊は、題名は異なりが原本は同じで、日本からニュージーランドへ送った段ボール箱の中に入れておいたので、現在は手元にある。

オークランドでの古書巡りの第2日目 (2013年6月2日：日曜日)

昨日に続き、本日も、3軒の古書店を車で回った。朝の9時に家を出発し、60キロを走って、3時間半後の午後1時半には家に戻ってきた。

まず、家に一番近いグリーン・レーン・イースト (Green Lane East) という高速道路に入り、国道1号線を北上して、ハーバー・ブリッジ (Harbour Bridge) を越えて、オークランド市街からワイテマタ・ハーバー (Waitemata Harbour) をはさんで反対側のノース・ショー (North Shore) 側に行き、エスモンデ (Esmonde) という高速道路の出口を出て、初めにタカプナ (Takapuna) という、この地区では一番大きな街にある古書店を訪ねた。家を出て30分程でこの町に到着し、地図で調べた場所の近くへ車を停めて、その古書店をのぞいたら、午前10時開店であったので、30分しか駐車出来ない場所から、その古書店の真裏の大きな駐車場へと車を移動して、駐車券を買ったら、1ドルで2時間まで駐車出来る場所であった (街中は、1時間8ドル)。その横のリサイクル店は既に開いており、そこでも古書売っていたので、時間つぶしに見て回って、2冊を4ドルで買った。1冊目は、店の前に置かれていた特売のもので、1ドルであった。

(10) *How to Talk to a Liberal (If You Must)*, Ann Coulter, Crown Forum, 2004, 1 ドル

(11) *Kiwi Jokers: The Rise and Rise of New Zealand Comedy*, Matt Elliott, Harper Collins, 1997, 3 ドル

この古書店は、Mark Book という名で、これまで一度も訪れたことのない店であった。小さなアーケード街の中にあり、ニュージーランドのノンフィクションの棚は、著者名順

に配架されており、とても調べやすかった。約 1 時間見て回り、次の 4 冊を 145 ドルで購入した。

- (12) *The Letters of Thomas Arnold: The Younger (1850-1900)*, James Bertram, Auckland University Press, 1980, 30 ドル
- (13) *Moriori: A People Rediscovered (Revised Edition)*, Michael King, Viking, 1989, 40 ドル
- (14) *The Oxford Illustrated History of New Zealand (New Edition)*, Keith Sinclair(ed.), Oxford University Press, 1998, 30 ドル
- (15) *Aotearoa and New Zealand: A Historical Geography*, Alan H. Grey, Canterbury University Press, 1994, 45 ドル

次に、オークランドの 1 つの観光地であるデボンポート (Devonport) へ車で 10 分程で行き、運よく、目的の古書店の斜め前に駐車スペースを見つけて車を停めた。1 時間以内なら無料で止められる場所で、急いで、既に 1 回は訪ねたことのある古書店に入った。この店は Evergreen Books という名前で、デボンポートの船着き場を出て、1 分の所にある。ニュージーランドのノンフィクション部門の書棚を急いで見て回り、下記の 4 冊を 56 ドルで購入した。

- (16) *Famous New Zealanders: The Human Stories Behind Their Great Achievement at Home and Abroad*, Eugene Grayland, Whitcombe and Tombs, 1969, 24 ドル
- (17) *A History of New Zealand*, Keith Sinclair, Penguin Books, 1980, 12 ドル
- (18) *Spies and Revolutionaries: A History of New Zealand Subversion*, Graeme Hunt, 2007, 14 ドル
- (19) *A Short Short History of New Zealand: Everything You Need to Know*, Gordon Mclauchlan, Penguin Books, 2005, 6 ドル

30 分もかからない内に、書籍の購入が終わったので、この古書店の並びに幾つかあるレストランの中の中華料理店で、14 ドルの昼定食 (ダック) を食べた後、再び車でオークランドの街中へ戻り、そこからオネフンガ (Onehunga) という繁華街へ行き、その中にある古書店へ向かった。今回も運よく、古書店の近くの道路に車を停めることが出来たが、30 分以内までの駐車であった。この 3 番目の古書店は、Books Wanted という名前で、書籍が多すぎるのか、積み上げるように置かれていた。30 分以内には戻らなければならないので、25 分で切り上げ、帰る途中に飲み物を買うと、監視員の女性が私の車を眺めていた。私が車に戻り、運転席に座ると、この監視員は、これまでいた場所を離れて、別の場所に移って行った。ここには、12 時半から 30 分しか居られなかったが、ここを出て家に戻ったのは、

午後 1 時半過ぎであった。この古書店で購入したのは、次の 3 冊で、30 ドルを支払った。

- (20) *Old New Zealand by A Pakeha Maori*, Frederick Edward Mining, Whitcombe and Tombs, 1956, 14 ドル
- (21) *A History of New Zealand (Revised Edition)*, Keith Sinclair, Penguin Books, 2000, 8 ドル
- (22) *Historical Dictionary of New Zealand*, Keith Jackson & Alan McRobie, Longman, 1996, 8 ドル

この 2 日間で、オークランドでトップ 8 に入る古書店の内の 6 軒を見て回ったが、残る 2 軒も、この 4 月からの滞在中に、既に訪問してある店であった。その 1 つは、ハイ・ストリートの Rear Books であり、もう 1 つは、デボンポートの船着き場内にある古書店である。後者の古書店は、ついさっきまで、ベスト 8 の古書店に入っているとは知らなかったもので、本日寄らなかったが、次週中には再度訪問してみることにする。

オークランドの古書店巡りの第 3 日目 (2013 年 6 月 4 日 : 火曜日)

昨日の月曜日 (6 月 3 日) は、女王陛下の誕生日で公休日であった。天気は、曇ったり晴れたり、暖かい 1 日であったが、本日は、夜中に雨音で目が覚めたように、雨が激しく降ったり、小雨になったり、雨の 1 日であった。

午前 11 時に街中のクイーン・ストリートでアポがあったので、その前に、火曜日と木曜日の午前 9 時半から午後 2 時までしか開いていない、ハイ・ストリートにある古書店の Rear Books を 10 時前に訪ねた。大学から歩いて 10 分程であるが、雨の中なので、坂道は歩きづらかった。この店はとても有名で、オークランドでの古書店と言えば、ここを指すほどである。既に、当地へ到着後に一度は訪ねていたもので、目新しいものはないことは分かっていたが、アポまで時間があつたので、様々な書棚を見て回った。首都のウエリントンにいる友人のマルコム・マッキノン (Malcolm McKinnon) さんが編集して出版された厚い書籍 (B4 版の 290 頁) があつたので、これを購入した。これで終わりかと思って他の書棚を見てみると、さらにもっと厚い書籍 (B5 版の 1782 頁) があつた。これは、日本の敗戦と占領に関する資料で、最後の索引の中に、現在論文を執筆中のジェームズ・B・バートラムの名前もあつたので、購入を決めた。これは、おそらくセット本の 1 冊であつたようで、この第 2 巻しかなかったのが値段も付いていなかったが、100 ドル以下なら購入しようと思っていたところ、女店主は 85 ドルとのことで、すぐに購入を決めた。なお、後に分かったが、これは 3 冊セットの書籍の第 2 巻であり、第 3 巻の書籍 (*The ZNZUS and the Treaty of Peace with Japan*) も日本とも関係があるので。第 1 日目に訪れた Jason Books で、後日 75 ドルで購入した。

(23) *New Zealand Historical Atlas: Visualising New Zealand*, Bateman, 1997,
55 ドル

(24) *The Surrender and Occupation of Japan: Documents on New Zealand External Relations Volume II*, Robin Kay (ed.), Historical Publications Branch,
Department of Internal Affairs, 1982, 85 ドル

雨も激しく、2冊で5キロ以上もあるような気がするので、その女店主に保管をお願いして、アポの場所へ徒歩5分程で移動した。会合は1時間で終わり、その足で、徒歩3分程のフェリーボートの船着き場に行き、12時15分発のデボンポート行きに乗った。往復で11ドルであったが、デボンポートに5分程で着き、船着き場内にある古書店へ行き、15分程で店内を見終わって、12時45分発のフェリーボートに乗り、オークランドへ戻った。この古書店は、Books@devonportwharf といい、以前は小規模であったが、最近、船着き場内で売店が立ち並ぶ小さなアーケードの両サイドに、古書を並べて売っている。ここも、4月に一度訪れていたもので、直ぐに見るのは終わったが、1冊、ニュージーランドの国立公園に関するパンフレットがあったので、それを購入した。

(25) *Journeys in National Parks*, Christine Dann, TVNZ Publishing, 1987, 9.5 ドル

オークランドに着いて、船着き場の前のショッピング・モールで、昼食として寿司とみそ汁を買って食べ、1時15分過ぎに、ハイ・ストリートの Rear Books へ再び戻り、そこで先ほど購入した重い書籍を2冊受け取って、雨の中を再び乗船場の前にあるバスのターミナル・センターへ行った。そこから循環バスで、大学近くのサイモンズ・ストリート (Symons Street) まで行き、バス停から再び雨の中を歩いて、ようやく研究室にたどり着いた。洋服も濡れていたもので、研究室に置いてあるコンピュータを持って、地下駐車場へ行き、そこからすぐ自宅へ戻った。帰宅時刻は、午後3時半であった。

一時雨が降ったが、午後5時過ぎには止み、西の空に夕陽を見ることが出来た。昼間は、大雨でズボンの裾が濡れてしまったが、今は、空の半分以上が青空である。

これで、オークランドにある8軒の有名な古書店巡りは終わった訳である。本日、3日目の2軒は、既に一度訪問済みであったので、オマケの古書店巡りであった。3日間の古書店巡りでは、金と時間を使ったが、購入した古書を利用して、論文を書けるような気分になったので、それだけでも良かったような気がする。なお、今回購入した書籍は、25冊 (合計542.5ドル) であるが、内容を分類すると、ニュージーランドの歴史関係 (通史と古い歴史: 02, 04, 07, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 24)、ジェームズ・バートラム関係 (01, 06, 12)、スパイもの関係 (03, 18)、その他 (08, 09, 10, 11, 25) に分けられる。これらを利用して、ヤング・マオリ・パーティ (Young Maori Party) とジェームズ・バー

トラムに関する論文を完成させたいと思っている。

【ニュージーランド滞在記】

ニュージーランド紀行～シャクナゲを求めて

宮本 忠 （前ニュージーランド研究所長・三重大学名誉教授、PhD）

宮本由紀子（三重オーストラリア・ニュージーランド協会理事）

草の根交流を求めて

三重オーストラリア・ニュージーランド協会は、20世紀ぎりぎりの1999年（平成11年）5月7日に設立されました。本協会が、ニュージーランドと友好関係団体を設立した契機の一つは次のようでした。三重県と奈良県を結ぶ大杉谷・大台ヶ原（オオダイガハラ）登山道とニュージーランド南島のミルフォードトラックとの姉妹登山道締結の話が個人的に、三重県関係者から、僕に寄せられたことがきっかけになりました。当協会の主要事業として、ニュージーランド及びオーストラリアのありのままの姿に接するために、両国への「草の根交流」が必要であると考えました。その具体化の一つが「両国への親善交流旅行」でした。第一弾は2001年7月29日から8月6日に、オーストラリアのカウラ（ニューサウスウェルズ州）において開催された全国オーストラリア・日本協会連合会設立大会参加でした。その主たる目的は、当時、日本には、オーストラリアおよびニュージーランドに関する友好団体が多数存在していたものの、自主・独立の団体で、統一的な連合会といった組織はありませんでした。この点は、両国とも同じでした。その先頭をきってオーストラリアが連合会を設立するというので、ぜひ見ておきたいと考えたのです。カウラには、太平洋戦争捕虜収容所がありました。旧日本兵も収容されていました。旧日本兵の集団脱走事件が、第二捕虜収容所で1944年8月5日の未明に起き、その日本兵の多くが射殺されるという悲劇がありました。カウラ市民有志が墓を作り、それを今も吊っているのです。その現場は、日本とオーストラリア友好の原点にすべきところであると思いました。大会後、参加者の一部はタスマニア・州都ホバートを訪問しました。それ以来、オーストラリアとニュージーランドを当協会は、親善交流旅行として毎年隔年ごとに訪問しています。昨2013年のニュージーランド訪問で合計12回となりました。

親善旅行の基本

私たちの訪問旅行は、飛行機以外、原則として、訪問先やツアーコース、宿泊施設、レンタカーなどを自分たちで企画、手配、実施することを旨としています。普通行なわれるような首長表敬訪問や公式パーティーは他の団体にお任せすることにし、「草の根主義」と「皮膚感覚」で旅することに重点を置いています。

第一回ニュージーランド訪問

ニュージーランドへの第1回の親善交流の旅は2002年10月2日から13日までの期間でした。8名参加のシャクナゲ・ドライブ旅行でした。ニュージーランド最大の都市圏人口120万人を擁する南緯37度00分、東経174度47分のオークランド国際空港に到着陸。空港ビル内のレンタカー事務所で保険などの手続を完了してレンタカーのキーを預かりました。日本で予約済みでしたのでスムーズに、ことが運びました。空港から国道1号線のモーターウエー（自動車専用道路）へもスムーズに入ることができました。日本同様、自動車は左側通行なので心強い。南下して、北島オークランドから、南島クィーンズタウンを経由し、氷河で有名なミルフォード・サウンドまでシャクナゲドライブをしようという作戦です。

西洋シャクナゲ

かつて、僕がリンカーン大学で客員教授をさせていただいていたとき、ニュージーランドのあちこちに見事なシャクナゲが見られ、そのシャクナゲは日本のものとかかなり趣きが違っているように感じていました。機会を見て一度じっくり観察したいものだと考えていました。

ニュージーランドのシャクナゲは西洋シャクナゲといわれ、高山に自生する日本シャクナゲまたは和シャクナゲとは区別されているようです。日本ではシャクナゲの花を‘せいそ’とか、‘そそとした’花と表現されるのに対しニュージーランドの花は、大きく、花の色は多彩でカラフルです。‘色あざやか’で‘ハデ’、‘自己主張的’などと表現されることもあります。木も日本では通常、山地において、低木であるのに対して、うんと大木で花は大輪です。平地でも普通に見られます。花にも国民性が反映されるのでしょうか。シャクナゲがツツジ属の亜属であることをこの旅で学びました。

ニュージーランド北島西海岸に面する、南緯39度17分、東経174度03分のタラナキでは、ガーデン・フェスティバル（庭園祭）、シャクナゲ祭が行なわれます。タラナキは、タスマン海と標高2518mのタラナキ山が織り成す自然豊かな地形に位置しています。

2013年のシャクナゲ祭は、11月1日から10日まで開催されたようです。この時期がタラナキ地方のシャクナゲの見頃なのでしょう。タラナキにはすばらしい庭園がそろっており、年に一度シャクナゲ祭が開かれるようです。そこではタラナキ地方に生育されている多様な品種の見事なシャクナゲが展示されているとのことでした。残念ながら今回のドライブ旅行では訪問する時間をつくることができませんでした。なお、南島の南緯45度52分、東経170度30分のダニーデンのシャクナゲ祭は、10月中頃から11月始めに開催されたようですので、その頃がダニーデンのシャクナゲの見ごろのようです。

いずれも、シャクナゲ祭は、‘春を告げる’あるいは‘春を彩る’催しになっています。機会を見て訪ねたいものです。

ニュージーランドのシャクナゲは、西欧、とりわけイギリスにおいて改良されたいわゆる西洋シャクナゲです。移民した人々が植栽したと思われます。イギリスへは、特に19世紀にプランツハンター（植物狩人）によって、主に中国原産のシャクナゲがもたらされたようです。外来動植物は、しばしば嫌われものにされますが、シャクナゲはウエルカム、歓迎ということでしょう。プランツハンターとは、西欧において、17世紀から20世紀中期にかけて、食料、香料、薬品、繊維などに利用された植物や観賞用植物の新種を求めて世界中を探検、冒険した人たちのことです。

オークランド国際空港から国道1号線を、晴天の下、快適に車は走ります。追い抜いて行く車はときにあるが、車の数は多くありません。大小の丘に緑の牧場と白い羊が点々。この風景がまさしくニュージーランドの風景です。しかし最近、軽く暖かい肌触りのいい化学繊維が普及したためか、この風景が見られなくなりつつあるようで、さびしい思いがします。ガソリンスタンドも公衆電話ボックスも道路沿いにありません。民家もまたほとんど見られません。空港をでてから約1時間。目もだんだん風景になじんできました。

ここらで朝食を兼ねた休憩。ようやく出会ったカフェテリアに元気よく入場。前日、シンガポール国際空港で乗換え、夜間飛行だったのにみんなはしゃいでいます。英会話の出来る者も、苦手な者も見事に注文。こちらスタイルで腹ごしらえができました。

ワイカト地方の中心都市の南緯37度47分、東経175度17分のハミルトンを横目で見ながら通過。ハミルトンの都市圏人口は約19万人。ニュージーランドでは第4に大きい都市。オークランドから130km。ハミルトン都市部をアツというまに過ぎ、再びのどかなニュージーランド的風景を見ながら車内おしゃべりがはずみます。

温泉都市ロトルア

南緯38度07分、東経176度19分のロトルア市は、市域人口約6万6千人の温泉観光都市。環太平洋火山帯の上に位置しています。オークランドから234km。先住民マオリの歴史・文化の漂う都市です。大分県別府市と1987（昭和62）年に姉妹都市提携しています。ここには日本人が経営する温泉モータールがあります。通常、ニュージーランドの温泉は、男女混浴で、水着着用することになっています。ロトルアのこのモータールは日本式で、男女別の裸の付き合いでした。

街には、別府と同様、温泉池から、硫黄の臭いをさせて白い湯煙が上がっています。温泉池の中では、これまた別府と同様、ブク、グツ、ブクと大小の泥坊主が沸きあがっています。遠い昔の高校の修学旅行を、忠は懐かしく思い出しました。メンバーの一人が卵を紐につるして温泉池に入れました。温泉卵が出来ました。プーンと温泉の香りの漂う中で食べた卵を忘れることができません。ロトルア周辺にはたくさん湖があります。

別の機会でしたが、その内の一つに案内されました。フライパン湖でした。この湖は、世界で一番広い表面積をもつ温泉湖だそうです。何とその湖の水面から白い湯気が立ち上っていたのです。その周囲の山道の小川からも山から滴り落ちるお湯からもまた湯煙が上がっていましたよ。このとき、地球が燃えている。「火の球」であることを実感し驚嘆しました。飛行機に乗って上空1万mを飛んでいるときいつも僕は思うのです。

「人は空気がなければ生存できない、飛行機も酸素のある地球表面を飛んでいるに過ぎない。水中でも生きることは不可能。大宇宙からすれば、僕はほんのわずかな空気空間に閉じ込められて息をしている」。そしてさらに僕は思うのです。別府やロトルアに来ると、「地中でも、火の中、激烈な高温、低温でも生きられない」。

ロトルアのあるこの地方には、熱水系の実感できる珍しい地熱地帯があります。これと関連して、100m以上も吹き上がる間欠泉もあります。私たちが間欠泉を見学に行ったときの出来事です。東京の女子高生の一団がにぎやかに入ってきました。可愛そうにも彼女たちは間欠泉を見ることができなかった。せつかく吹き上げる間欠泉を見るために来たのだらうに。

「時間です。集合して次の見学場所に移動します。急いでくださ〜い」とガイドのおねえさんに追い立てられて一団が去りました。その直後、大きな音響を立てて間欠泉が高く高く青空に向かって吹き上がりました。間欠泉とフライパン湖は地下の熱水系が同じだといえます。

ロトルア市街の住宅街や公園の庭や垣根にも、シャクナゲの木が、大きな真紅や真っ白の大輪を所狭しと咲かせているのに度肝をぬかれました。民家の宅地は一般に広いので、大きな木の垣根もさまになっています。

「公園の大木のしゃくなげ、庭先の色とりどりのしゃくなげ、変化もあって、写真の被写体にはことかかないわ」と由紀子は感嘆しました。

北島西海岸タラナキ地方の中心都市は、南緯39度、東経174度のニュープリマス(New Plymouth)です。ロトルアから約185kmです。ニュープリマスは、オークランドと首都ウエリントンとのほぼ中間にある興味深い海岸都市です。タスマン海とタスマン半島を背景に長いサーフィン海岸道路が続いているそうです。これと並んで注目されるのが、シャクナゲ祭です。ニュープリマスには見事な公園や庭園が多くあり、春になると、あちこちにシャクナゲやツツジが咲き、花であふれるといわれます。とはいえ、ロトルアからかなり離れており、今回はこれもまたパスしました。

当店はネクタイで

北島から南島へは、フェリーで移動する手はずです。北島の乗船港は首都ウエリントンです。ロトルアからウエリントンの距離は約375kmです。ロトルアを朝出発し、ウエリントン港近くのレストハウスに夕方前に到着しました。ウエリントンは南緯41度17分、

東経174度46分の位置にあります。南島の到着港は南緯41度、東経174度のピクトンです。ウエリントンとピクトンとの間のクック海峡を、3～4時間で渡航する船旅です。北島のドライブ旅行の最後の日であり、首都ウエリントンに敬意を表して、「たまには高級レストランで夕食をとろう」とそれなりのレストランにドライブ姿で行きました。ドアには規律正しいドアボーイがいて、「当レストランでは背広、ネクタイの着用、お願いしています」と丁重に断られました。

ニュージーランド的合理主義

今ではレンタカーの利用にかなり慣れてきましたが、このときもいい勉強になりました。フェリーに乗船の前日、念のため、港に出かけ、レンタカーの扱いについて問題が起こらぬように、下調べをしました。レンタカーはウエリントン港にある駐車場に返し、そして下船するピクトンのレンタカー事務所で再び借りることになっていました。この点がいまひとつわかりませんでした。確かめておきたかったのです。出港の朝、ルンルン気分でモーターを出ました。余裕をもって出かけました。ところが駐車場には係員も誰も見当たりません。キーを入れる返却用の箱がただポツンと置いてあるのみでした。こういう場面はニュージーランドでときどき出くわすことは慣れてくるとだんだんわかってきます。初めのうちは面食らったものです。僕は、こういう事態を「ニュージーランドの応用問題」あるいは「ニュージーランド的合理主義」と呼んでいます。人口の少ないこの国の人々が案出した「アイデア」であると考えています。

夏時間騒動

首都ウエリントンに到着。バーカンシー（空き室有り）と表示してあるモーターに行けば、受付が案内してくれます。気にいればそこのお世話になります。これが僕たち流のやり方です。8名という大人数だったので、オーストラリアのどこの都市にでもあるビクターズ インフォメーション センターを利用しました。ここでは宿の予約をはじめ、種々の町の情報をえることができるので安心です。4泊目にやっと8名が同じ屋根の下で休むことができました。このレストハウスは、1、2階は外階段で通じていました。私たちは1階です。安普請なのか、2階の人があるくとミシミシ音がする。おしっこはチョロチョロ、用を足した後はジャーと水洗の響き。夜中の音は大きい。一人約3千円で泊めてくれるのだから。我慢、我慢。疲れていたのか直ぐに眠りに入ったが、夜半2階が妙に騒がしい。眠れなくなった。朝、聞いてみると、「ピーピーと警告音が鳴りだした。どうにも止まらない。大騒ぎになってしまった。借りてきた携帯電話なのです。バッテリー切れでした」と。

そんなとき由紀子が突然言い出した。「きょうは10月の第一日曜日、夏時間が始まるん

じゃないの」。

「そうだ。ここに来る前に、日本でそんなことを言っていた。時計が一時間早くなる。これはえらいこっちゃ」。今朝8時にウエリントン港からフェリーで南島のピクトンに渡らなければならない。その前にレンタカーを港事務所に返却しなければならない。少なくとも6時に起きなければ間に合わない。夏時間が始まるかどうか確かめていない。間違ってみんなを起したら袋叩きになってしまう。

忠は、愛用の携帯ラジオをイヤホンで一所懸命に聴く。3時になっても4時になっても時報がない。トーキング番組がペチャクチャ話しているのだが、時報も夏時間のことも言わないように思えた。うつらうつら聞いていたので、あるいは話していたのかもしれないが。ようやくラジオから、

「只今5時です」というメッセージが飛び込みました。自分の時計で確認してやっと思いでみんなを叩き起しました。

南半球の初春の10月の夏時間開始の朝7時のウエリントン港はどんよりと曇っていました。うす暗く冷たい。フェリー発着場は誰もいない。私たち8名以外は。朝食も取らずに港に来たのに。木製の腰かけがやけに固く冷える。おばさんが掃き掃除をしていたので、「8時の高速フェリーでピクトンに行くのだけれど誰もいない。どうしたんだろう」と訊ねたら、

「海が荒れているから出ないんじゃない。私にはわからないけれど」と冷たい返事。

突如煙草で喉を痛めたような声でハンドマイクのおねえさんが怒鳴りだしました。

「8時出港予定のピクトン行き的高速船は、海が荒れているため欠航です。乗船予定のお客様は9時半発の船に乗り換える手続きをしてください」「アーアー」、急におなかがすいてきました。

鷗に送られて

結局、私たちが乗船予定していた高速船は、荒波のため休船となり、普通のフェリーで南島のピクトンに渡ることになりました。飛行機の場合と同じで、ボデーチェック、荷物検査を終え、荷物を預けました。乗船手続き完了。かなり大きな船で、レストランなどもある。ゆっくり出航する船に荒波がドスン、ドスンと船体にぶつかりましたが、愉快でした。にぎやかな鷗が、高い波を避けているのか、餌を求めてか、それとも私たち日本人を歓迎してか、フェリーのほんの近くまでガアガア鳴きながら飛んできました。

南島に上陸

ピクトンは南島の最北端。南緯41度、東経174度に位置します。南島の北の海の玄関口であり、空港もあり、鉄道の終着駅もあります。南・北島交通の要路です。

鉄道の駅前には土産店などがあり、見事なシャクナゲの垣根もありました。しかしここはニュージーランド。かつてはピクトンに一時、ニュージーランドの首都が置かれたこともあったようですが、現在は、人口3000人ほどの静かな町です。マルボロー地方に属しており、近くに南島を代表する葡萄、ワインの生産地があります。今回はそれに目をつぶり、南島を南下、国道1号線をひたすら走ることにしました。鯨ホエールズウォッチングや、海岸の遊歩道に寝そべるオットセイなど野生動物と人の共生（トモイキ）の町カイコウラも、横目で見流しました。ときに道路沿いにあるシャクナゲが、100kmのスピードでたちまち「うしろ」に去って行きました。

一路、南島最大の都市圏人口40万人を擁する、クライストチャーチに向かう。そこに、すでに何度かお世話になっているモーテルを、今晚の‘お休みどころ’に予定しているからです。薄暮が迫る頃、到着しました。クライストチャーチには、その中心街のすぐ近くに超特大のハグレー公園があります。クライストチャーチでは、ハグレー公園を含む街全体に広がって、2月から3月にかけて、例年、‘International flowers Show(世界花まつり)’が大々的に展開されます。世界から多くの人々が参集します。しかし今回は10月であり、目的も異なるのでクライストチャーチは一泊だけにしました。クライストチャーチのフラワーショーは別の機会に見学しましたが、ここではこれ以上触れません。

ミルフォードを目指したが

きょうは、国道一号線をさらに南下して、クインズタウンを基地に、ミルフォードサウンドを目指します。ミルフォード辺りのシャクナゲを追わんとするものです。ミルフォードサウンドは、南島南西部のフィヨルドランド国立公園の一部を構成しています。サウンドとは、タスマン海から内陸へ約15km続いているサウンド(入り江・小湾)の総称です。1200m以上の断崖絶壁に囲まれ、絶壁には鬱蒼と多雨林が茂っているようです。その下の海にはアザラシやイルカ、ペンギンが見られるところです。私どものレンタカーでどこまで行けるかわかりませんが、行けるところまで行き道すがらシャクナゲにお目にかかるという計画です。

晴天のドライブ日和が続いています。ときに国道沿いに植栽されているシャクナゲ観賞を重点におく気楽なドライブ旅行です。南緯43度51分、東経172度65分のクライストチャーチから南緯45度01分東経168度39分のクインズタウンまでは、約480kmあります。時速100kmで、寄り道せずに走っても5時間はかかります。道路事情のよい国道を突っ走るならば、私たちでも5時間でクインズタウンに行くことは可能だろうと思います。それも、また「楽しからずや」です。「当然」というべきか、私たちはそのような選択はとりませんでした。

シャクナゲや羊のいる牧場で写真を撮ったり、散策したり、また、途中でパンや‘フィッシュ・アンド・チップス’などを買って野外昼食する自由な旅です。道すがら、地方の

人たちと雑談することも楽しみの一つです。クインズタウンのモーテルに到着したのは、夕暮れでした。クインズタウンは、人口1万7千人ほどの‘リゾート タウン’であり、‘アルペンの拠点’です。

私たち夫婦は、忠の勤務先の都合でその翌日みんなと別れ、日本に帰ることが出発前から予定されていました。

エッ、道路が不通！

翌朝、この旅行の慣例で、一つの部屋に全員が集まって、すでにマーケットで買ってある食材を当番で調理し、朝食をいただき、当日のミーティングをしました。そして、「それでは気をつけて、ミルフォードのシャクナゲの旅の成功を祈っています」と、私たち夫婦はミルフォード組をモーテルで見送りました。

私たちがタクシーでクインズタウン空港まで行く途中、気さくな運転手さんからとんでもない仰天するニュースを聞きました。

「あなたたちの友達ミルフォード・サウンドに行けないよ。途中で山崩れがあり、道路が遮断されている。俺はさっきそこから引き返してきたところだ」。

「明日は通行できるかな、大丈夫かな？」とびっくりして聞いた。

「それは無理だろう。どうなるか俺にはわからないよ」と運転手さん。

ミルフォードへ行く山道が土砂崩壊で通行止めだというのは。仲間はどうしただろう。せっかくの楽しみにしていたミルフォード・サウンドとシャクナゲの旅ができなくなってしまった。当時は、まだ携帯電話は普及していなかった。ほとんど人通りもない山道。連絡方法もわからない。

「このタクシーで応援に行こうか」とつぶやく。

「行ってどうする？ どうしようもないよ。6人もいることだし、何とかなるだろう。もどればいい。クインズタウンには見所がたくさんある」と運転手さん。

心配しながら、予定通り私たちは、国内便でオークランド空港に飛び、国際線に乗換え日本に帰った。

かれらの帰国後、次のような話を聞いてやっと安堵することができました。

「途中で何回か緊急の立て看板のようなものがあつたが、それを無視して行けるところまで行こうと、どんどん車を走らせた。そして、ついに、道路が土砂崩れで遮断されているところに突き当たった。通行が出来ないように道路にバリケードが出来ていた。それ以上車を進めることができなくなった。クインズタウンに引き返し、休憩した後、クインズタウン周辺を観光したよ」。

【ニュージーランド短期語学留学】

第 11 回ニュージーランド短期留学に同行して

菅井マリー（東北公益文科大学専任講師）

The Opportunity for students to go to New Zealand was a chance for them to experience living English, both in an academic university environment and in a home environment. There were also work experience opportunities available for those students who wanted to try using their English in a job setting.

Each of these three contexts provided participating students with a varied and stimulating situation to practice and develop English listening and speaking skills that is impossible to recreate authentically studying English in Japan.

We left campus very early on a snowy day and travelled to Korea where we changed planes to Auckland New Zealand. It was a lot of fun packed with new experiences being on 2 airplanes and having so many new mini experiences on the way.

We arrived in Auckland in strong summer heat! Quickly packing coats into our handbags we left the airport and were greeted by Mike who was really friendly and chatty and drove us to the Waikato University campus.

Students met their homestay families. Everyone was tired but relieved to have a nice bed to stay in that night!

The following day we had orientation. The campus is beautiful and the library and good court really exceptional. All the students were excited and inspired by the day of orientation and placement tests were a breeze!

After students were placed the lists went up and classes began. I visited all the students classes and can vouch for the fact that the teachers were excellent and our students were taught really well and looked after with tremendous individual care. There were so many activities and events and students also arranged with other students different things to do. A huge variety of cafes and areas to hang out made it a very real University abroad experience, with lots of cultural newbies; interacting with students of all nationalities and everyone made lots of new friends. It was an experience of a lifetime and the beautiful weather, great food and excellent teaching made it a memory and a motivator to study English hard for every student that participated.

【ニュージーランド短期語学留学】

ニュージーランドでのインターンシップを終えて

古城 楓子（東北公益文科大学公益学部3年）

3週間の語学留学を終え、早朝に後ろ髪を引かれる思いでハミルトンを後にした。インターンシップは2013年3月11日～15日の5日間。私は留学に行く前から語学研修よりもインターンシップが一番不安に感じていた。新しいホームステイ先はハミルトンにいる最中に知ったのだが、インターンシップに参加する全員がそれぞれ遠く離れた場所ですぐには会えない距離であるため、英語しか話せない状況を想像して非常に不安であったしここからが一番の山場だろうと感じた。

私がインターンシップを行ったのはTHERESA ELIZABETH Holiday Home for Dogsという山の中にある大規模な犬専用のペットホテルだった。施設は山奥にあり場所が複雑なので新しいホームステイ先に到着してから、私はOKC事務所のゆかさんと合流して詳しい場所やバスの乗り方を教えてもらった。車に乗り実際に場所を教えようと思っていた以上に距離が遠く戸惑った。バスの乗り換えが最も少ない乗り方を教えてもらったのだが、ステイ先から徒歩で30分でバス停に行き、バスに乗って20分、降りたバス停から再び徒歩で40分だった。インターンシップの後半は慣れたが毎日移動だけでへとへとだった。ステイ先に到着してからすぐに私はゆかさんとインターンシップ先に行った。施設に到着した途端、施設内に大きな犬の鳴き声が響き渡った。私はドキドキしながらゆかさんに続いて施設内に入った。入った次の瞬間、たくさんの犬が部屋から一斉に飛び出してきた。犬たちに続いて担当のJennyが出てきて挨拶をしてくれた。Jennyの話す英語は非常に早くて中々話している内容が聞き取れなかった。少々不安に感じたが、ゆかさんから「もし話していることが聞き取れなくて分からなかったら分かるまで聞くんだよ」と言われて自分の気持ちを奮い立たせた。説明を聞き終えたらしばらく施設を見学したり犬と遊んだりしていた。私はかわいい犬たちと触れ合いながら一刻も早くここで実習がしたい！と思った。

施設にいる犬の9割は大型犬でその大半は様々な家庭の事情により預けられた犬だった。しかし、中にはJennyの飼っている犬やJennyが保護した犬なども含まれていた。そして犬の1匹1匹の性格はそれぞれ異なるため、相性のいい犬同士が大体2匹ずつ区画された部屋にいる。その中にはどの犬とも性格が合わずに1匹だけで過ごす犬もいるし、性格が穏やかな犬だと施設内に離し飼いになった状態で過ごしている。広い施設内は自然も多く、非常に犬に適した自由な環境だった。そしてスタッフが定期的にご飯をあげたり、外で遊ばせたり、掃除をしたりする。私の実習内容は主にそれらの手伝いや犬と遊ぶことだった。インターンシップの初日は特に問題もなく施設に移動し、Jennyにやり方を教えてもらいながら犬の部屋をモップで掃除したり、ご飯のドッグフードを食べやすいように水でふやか

してから与えるなど主に犬の世話を手伝った。他には犬が広いパドックという庭で遊んでいるのを時間を計測しながら監視していたりした。私は犬が本当に大好きで特に大型犬が大好きなので、たくさんの犬たちに囲まれた環境で実習が出来て本当に実習中は幸せだった。私は犬たちに会いたくて、ゆかさんに事前に話をしてもらって実習中は決められていた時間よりも1時間も早く毎日出勤した。少しでも早く長く犬たちと一緒にいたくて朝早くからステイ先を出発して夕方頃に帰宅する生活を送っていた。

しかし、インターンシップを初めて3日目に私は問題を起こしてしまった。その日の午前中は各部屋の掃除をして、昼ご飯を食べた後に午後からは犬を庭で遊ばせた。その時、犬は4匹でその中の1匹の Jess (雑種♂) が私のところにボールをくわえてやってきて、投げて欲しい仕草を取ったためそのボールを投げたのだが、Jess がボールを追いかけよううちに Jess 自身が前足でボールを蹴ってしまい、その蹴られたボールが寝そべっていた Tessy (雑種♀) に当たって Tessy が怒って突然 Jess に襲い掛かったのだ。Tessy は普段は極めて大人しい性格なのだが、眠りを妨げられたせいか非常に怒っていて Jess も驚いたのかそのまま Tessy と本気で喧嘩を始めた。私はどうやって止めたらいいのか分からず必死で体を張って止めようとしたが跳ね返されてしまい無駄だった。すると、施設の男性スタッフが来て勢いよく水をかけて犬同士の本気の喧嘩を止めたのだ。Jenny もこの騒ぎに気付いて急いで駆けつけてきてくれたのだが、男性スタッフの方は私を見てから Jenny に「何で彼女がいるのに喧嘩を止められなかったんだ！」と強い口調で叫んだ。Jenny は「彼女はボランティアなのよ！」と言って私に気にすることは無いと言ってくれた。よく見ると Tessy の右耳は Jess に本気で噛まれたため少し曲がって変形していた。Jenny には気にしなくてもいいと言われたが、私はあの喧嘩を止めることが出来ていたら Tessy の右耳がこんな変形することもなく無事に済んだのにと自分を責めた。その日以来、Tessy は撫でようとすると少し怯えるようになってしまった。Jenny は私に犬の喧嘩の止める上で大切なことをいくつか教えてくれた。それは「水をかける・素手は絶対に使わない・足で蹴る」という事だった。犬を足で蹴るなんて私は出来ないと少し考えたのだが、Jenny 曰く犬の喧嘩を止めるときに素手で止めたら自分の手が怪我をするため足を使って止めるのだと教えてくれた。私はその話を聞いて改めて犬の本気の力と犬との上手な付き合い方を学んだ。

インターンシップ最終日、掃除やご飯をあげた後に Jenny に呼ばれて行くと評価書とイースターのチョコレートをくれた。Jenny は「いろいろ大変なことがあったけど、犬たちもあなたが来てとても嬉しそうだった。犬と心で会話することを忘れないで」と言って優しくハグをしてくれた。私はこの5日間インターンシップをしてみて大変なこともあったがますます犬が大好きになったし、もっとたくさん触れ合って犬のことを知りたいと思った。そのためには犬の感情表現や特性を理解し、犬と分かりあわなければいけない。それに日本では中々見れないような犬とも触れ合えることができ本当に私にとって最高の環境で、私にとって犬は大切な存在だということに改めて気づかされたインターンシップだった。貴重な経験をさせてくれた関係者の方々には本当に感謝である。

インターンシップ先での写真♪



【ニュージーランド短期語学留学】

New Zealand 体験記

酒井 貴大（東北公益文科大学公益学部3年）

今回の留学を通して、私自身、人間として成長できたと実感できた。ニュージーランドでは、様々な人種の人が住んでいた。その人の数だけ、色々な考え方や価値観があり、それを知ることで自分にもプラスの側面があり、刺激をたくさんもらった。

ニュージーランドに着いてまず感じたのが、とても暑いということだった。先生から聞いていたが、まさかここまでとは思っていなかった。庄内の厳しい冬を体験していたので、なおさら暑く感じた。慣れるまで、3日間くらい必要とした。そして、ホストファミリーと対面した。私の迎えには、ホストマザーの **Vanda** と娘の **Diana** が迎えにきてくれた。

二人はとてもフレンドリーで、日本がとても好きだった。実際に旅行で、東京の原宿や渋谷を訪れて、ショッピングを楽しんだといていた。私はたくさん日本のことを話した。カメラに地元の写真や庄内の色々な景色を撮っていたので、それを見せてあげた。二人はとても興味津々な様子だった。その中でも、一番聞かれたのは東日本大震災のことだった。

私の地元は福島県なので、尚更心配された。原発問題や自然エネルギー問題など話が飛躍し深い話をたくさんした。日常会話は、問題なく意思疎通ができたが、専門的な会話になるとどうやって英語にしていかわからず思うように伝えることができなかった。もっと英語を勉強して、スムーズに伝えたいと感じ、自分の英語力を上げるモチベーションになった。色々な話をしているうちに、私がホームステイする家に着き、シャワーの使い方や朝食、昼食のことなど、丁寧に細かく説明してくれた。ホームステイ先にはベトナム人の **Hengury** という高校生の男の子もホームステイしていた。すぐに仲良くなった。みんなでいっしょに夕食を食べて、その日は終了した。みんな優しく、私は本当に恵まれたと思う。3週間楽しく過ごすことができた。

毎日の授業はワイカト大学で学んだ。ここでの3週間の授業は本当に自分にとってプラスになることばかりで、自分の英語力をアップすることができたと感じた。

初めは、先生のネイティブな発音を聞き取るのが大変だったが、1週間もするとわかるようになり、自分から先生に積極的に英語で質問したり、英語で日本やニュージーランドの文化を話したり楽しく会話をすることができた。午前中は主に、ライティングとリスニングで、午後はスピーキングとリーディングという授業だった。この授業で色々な英語のボキャブラリーや言い回し、英語の感嘆詞の正しい使い方を学び、実り多いものになった。

そうやって刺激のある毎日を過ごしていき、3週間が過ぎた。最後の、フェアウェルパーティーでは、一人一人に修了証が手渡された。また、ホストファミリーにお礼のスピーチや出し物を送った。スピーチの原稿を考えるのは大変だったが、ワイカト大学の先生に

添削してもらい、何とか形にすることができた。このとき感じたことはやる気があればスピーチも作成することができたので、何事もチャレンジ精神を持って、物事に取り組もうということである。出し物はラジオ体操を披露した。公益大のみんなで放課後集まって、たくさん練習した。You Tubeなどでラジオ体操を見て、覚えて研究した。せっかくなので、ホストファミリーや先生達にも実際にラジオ体操をやらしてもらおうと思い、英語でラジオ体操の説明を作成した。発表の時は、盛り上がるかどうか不安だったが、みんなで盛り上げて全員でラジオ体操を成功させた。この時、かなりの達成感を得ることができた。和やかにフェアウェルパーティーを終えることができた。本当に思い出深い3週間であったと感じた。

私は、この3週間で多くのことを学ぶことができたと感じている。特に、ホストファミリーにはたくさんお世話になった。私は、ホームステイをするのが生まれて初めての体験だったので、本当に貴重な体験だったと思う。日本人の私を快く迎えてくれて、まるで自分の本当の家族のように接してくれたので、かなり過ごしやすかった。

公益大のみんなや他大学生のみんなにも感謝したいと思う。やはり、慣れない環境にいると少なからず、ストレスも段々溜まってくる。その中で、愚痴を言い合ったり、ニュージーランドで苦勞した事を話せる友達は本当にありがたいと感じた。慣れない異国の地で、色々な体験や学生生活、買い物、同じ時間を共有できたことを糧にして、日本に帰っても、この気持ちを忘れずにしていきたいと強く思った。

こうやって体験記を書いて、思い返してみると、その気持ちは一層強くなる。本当にかげがえのないものであった。もっとニュージーランドにいて、更に、英語力や、色々な人々と関わっていたいと思った。

この貴重な体験を契機に、日本に帰ってからは、自分から様々なことにチャレンジしていこうと強く感じた。受身の状態、何もせず、ただ待っていてもチャンスはやってこない、自分からチャンスを掴みにいかなければならないと留学を通して、一番感じたことだ。

留学を通して一回りも二回りも成長できたと実感している。英語が、もっと大好きになった。とても忙しかったが、輝いていた3週間だったと思う。これを読んでいる人たちにも是非ニュージーランドにいて留学を体験し、素敵な思い出を作してほしいと心から思う。

私は将来、お金を貯めて、またニュージーランドに行きたいと思う。大学生のときにあったときはまた違った発見や出会いがあると思う。このような機会を与えてくださった大学には本当に感謝している。最高の時間をありがとうございました。

【ニュージーランド短期語学留学】

New Zealand でのファームステイ

佐久間 有紗（東北公益文科大学公益学部3年）

私がファームへのインターンシップを決めたきっかけは実家が農業をしていることもあり、外国での農業はどのようなものか体験したかったからだ。日本とニュージーランドは季節が逆であったため、季節の関係で農作物では行き先がないかもしれないとのことだった。そこで日本では体験できないようなことをしてみたいと思い、ファームへのインターンを決めた。

私はインターンシップ中のホームステイ先に関して混乱してしまった。そもそも、インターン先は留学が始まる前から決定していたが、インターン中のホームステイ先は留学が始まってから連絡が来ることになっていた。私はファームでインターンすることはファームステイになることを知らず、ステイ先の連絡がこないと日本に残った先生に相談して心配をさせてしまった。私がファームステイであることを知ったのはインターンを計画してくれている現地のスタッフの方と電話をした、インターンが始まる1週間前だった。

私がファームステイでお世話になったのはリンディー(Lindy)とロス(Ross)のウィルソン(Wilson)夫妻だった。そして動物の世話を手伝えるために住み込みで働いているアーサー(Arthur)もいた。インターン中はアーサーが私に様々なことを教えてくれ、一緒に作業をしていた。子供はいなかったけれど、ほぼ毎日ウィルソン夫妻の娘さんが子供たちを連れて遊びに来ていた。そして馬が5頭、アルパカが2頭、牛が1頭、犬と猫が1匹ずつに羊が数十頭という大家族だった。さらにウィルソン夫妻の家はファームステイでは有名らしく、自分で会社を通して留学に来た人が私の他に2人(マサエとサヤカ)いた。この2人はインターンではなく、動物と触れ合うことが目的のファームステイだった。ロスは「2人はファームステイで有紗はワークステイだね。」と言っていた。

私が手伝った作業は主に4つだった。1つ目は馬糞拾いだ。ウィルソン宅では乾燥させた馬糞を肥料として使っていた。そのために麻の袋に馬糞を拾い集めるのが私の仕事だった。匂いが心配だったが、馬は牧草しか食べないので糞からは牧草の匂いしかせず、全く気にならなかった。単純な作業ではあったが、いっぱいになった麻の袋はとても重くなって大変だった。

2つ目は柵の修理の手伝いだった。動物たちを囲っている柵は金属の線で囲った上から木材で固定していた。この木材が劣化しているものやずれてしまっているものを修理する作業だった。アーサーが金属の線と木材を固定する金具を金槌で打ち付ける際に、木材が動かないように固定することが私の仕事だった。斧のような柄の長いもので支えた。柄が長い分、打ち付けた時の振動が体に強く響いて大変だった。この次の日はほぼ全身が筋肉

痛になってしまった。

3つ目は木材を使って格子状のものを作る作業だった。アーサーが木材を適切な長さに切断し、私が切断された木材を並べ、釘を打つことが私の仕事だった。針がしっかりと刺さっていないときや木材が曲がっているとやり直した。やり直しのときはアーサーがほとんどしてくれた。とても申し訳ない気持ちだった。私と与えられた作業にチェックが入るのは初めてのことだった。ただの手伝いではなくインターンであることを自覚した瞬間だった。

4つ目はリンディーが手入れをしている庭のごみ拾いだ。ゴミといっても切り落とされた余分な枝や木材を運び出す作業だった。このとき私は軍手を持っていなかったの素手で作業をしていた。そのことに気づいたリンディーから「どうしてあなたは軍手をしていないの？」と言われた。私は気にしていなかったのだが危ないと注意された。リンディーは元々口調が強めだったので怒っているかいないかもわからず、私は謝ることしか出来なかった。するとリンディーはアーサーに色々話していた。前回に引き続きアーサーに迷惑をかけてしまったと反省した。

この日、私は初めてマサエとサヤカにインターンは大変だと話した。元々大変だったが、楽しく出来ていたので毎日楽しいと2人に話していた。すると2人は「大変なのは当然だよ。いつも頑張っている姿を見ていたから、むしろ楽しいと話している有紗がすごいと感じていた。」と言ってくれた。誰かにインターンでの作業を認めてもらったのは初めてだった。思わず泣いてしまった。このとき実際に就職して働くことを想像した。報酬だけでなく、このように温かい気持ちになれるかなれないかで充実感が変わると強く感じた。

インターンの仕事以外にも私は貴重な体験をした。それは動物たちとの触れ合いだ。ほぼ毎日何かしらの動物たちの食事を手伝っていた。動物につけた手綱を持って芝生があるところに連れていった。アルパカには手で草を千切ったものをあげることもできた。時々恐怖を覚えたけれど、動物たちはいつも癒しを与えてくれた。

私が帰国する前日の夕飯のときにロスが「有紗のようなワークステイの子が明日から来る。」と言っていた。私は冗談で「きっと私より良いファーマーが来るよ。」と言ったらリンディーとロスは「あなたはとても立派なファーマーだった。」と言ってくれた。日本人の感覚で言うとお世辞だったのかもしれないが、とても嬉しかった。私はウィルソン夫妻のもとで1週間お世話になった。とても短く感じた。今度は働いてお金を貯め、休暇でファームステイに行こうと考えている。

最後にファームステイを受け入れてくれたウィルソン夫妻。私に様々なことを経験させてくれたアーサー。ファームステイを設定してくれた現地スタッフの方々。私の生活をより充実させてくれたマサエとサヤカ、そして動物たちに感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとう！

【ニュージーランド短期語学留学】

ニュージーランドでの短期語学留学

高橋 一輝（東北公益文科大学公益学部3年）

私がこの留学に参加した最大の理由は、アルバイトをしておらず時間を持て余しており、それによって怠惰な生活を送るならば、お金を掛けてでも留学に参加し充実した春休みにしたいと考えたからだ。また、参加したきっかけになったものは、昨年度に受講したトップセミナーである。その講義では主に山形を拠点に活躍されている方にお越しいただき、自身のキャリアを述べられたが、講義の担当になっていた高橋先生を始め、ほとんどの方が外国での経験について語られた。私自身も、海外に行き異文化に触れ、本物を五感で感じることは大切だと考えるようになった。アルバイトをしていないこと、トップセミナーを受講していたことが留学参加を決意させた。

ホームステイ

ホストファミリーと会うまでは、金髪碧眼の家族を想像していたが、私のホストファミリーはフィリピン系であった。父のマイケルはニュージーランドでは仕事をしておらず、毎日家事をしていた。母のジャネットは看護師をしているため不規則なライフスタイルを送っていた。2人とも28歳と若かったため特に気負いすることなく接することができた。事前情報では、4歳のルーズという少女がいたが、フィリピンで休暇を取っていたため会うことができなかった。代わりに居候しているインド人のディティがいた。

私の家のルールについてだが、室内は土足厳禁でスリッパをはいていた。シャワーは15分以内で済ませれば良く、いつ浴びてもよかった。洗濯は3~4日に1回のペースだった。私は朝食を摂っていなかったがコーヒーを毎日出してもらえた。昼食は他のホストファミリーと比較すると手抜き感が否めなかったが、夕食は味も質もレベルが高く全体的に見て恵まれた家庭だと思える。

しかし困ったこともあった。私の家庭にはティッシュが存在してなかったので現地調達しなければならなかった。また、ごみ箱もなかったので、レジ袋を利用していた。そして何より困ったことが、暇な時間が多かったことだ。夕食後、私の家族はたいてい自室でルーズとスカイプをしていたので私は1人であることが多かった。お気に入りの洋画を持っていけば暇つぶしになり家族と関わるきっかけになったと思う。

お土産としてお茶漬やレトルトのカレーを持って行ったが、マイケルとしては日清のカップラーメンや焼酎が飲みたかったようだった。形として残るものも持って行ったが、彼らにとって家族に受け入れた初めての留学生が私だったらしくかなり喜ばれた。

学校生活

私のクラスは、午前中は公益生が3人で午後は7人だったので特に緊張することなく授業を受けられた。思ったより日本人の留学生が多く、日本人以外では韓国人が多かった。授業は毎回中身が濃く疲れたが、授業を通して友達ができたことを考えると授業から様々なものを授かったと言える。

ワイカト大学は公益大学と比較するとはるかに大きく、特に50mプールがあることに衝撃を受けた。プールは\$2で利用できたため、水着を持っていけばよかったと悔やまれた。体育館もあり、バスケットボールやバドミントンができるので運動できる服装や内履きがあると便利だった。

生活全般

私は、移動手段としてバスを利用した。1回分の乗車料は\$2.40なので3週間利用するとそこそこの額になった。ハミルトン市内には大きなショッピングモールがいくつかあり友達とショッピングを楽しめるが、オークランド市には日本語を使える店員が勤務していてショッピングがしやすく、幅広いジャンルの店があり品揃えも豊富なので、私の意見としてはオークランドでお土産などを買うことをおすすめする。

ニュージーランドは時期的には夏だが朝と夜中は15℃くらいまで気温が下がるので服装には気を付けたほうがよいだろう。

ソウル

私はインターンシップをしなかったため、野口君と2人で帰国することになった。仁川空港に到着してから早速ソウル行のバスのチケットを買ったが、買ってから10分以内に乗車しなければならず、そのことは知らされなかったため非常に大変だった。ソウル2日目は、午前中は完全に自由時間だったため、光化門や景福宮を訪れた。日本で言うところの寺院みたいなどころだった。過去にこの地を日本が占領していたようで光化門も景福宮も燃やされたらしい。光化門の前には大きな道路があり、戦争になるとその道路は滑走路として機能することも知った。東京とソウルは似ているように思えるが、根本的なところでは大きな違いがあるのではないか。このようなことは現地に行くことでより主観的な視点で考えられ、色々考えさせられた。

終わりに

私はクレジットカードをメインに買い物していたが、ある日突然カードが止まってしまった。原因は磁気によるものだった。ある程度お土産を買っていたので助かったが、留学を考えている方には十分注意してほしい。ホームステイ先や学校ではWi-Fiを利用できるので、日本にいるうちにLINEやFacebookのアカウントを作っておくと同じ学校の人だけでなく、留学先で知り合った友人とも連絡のやり取りができる。

私は留学に向けて特に勉強をしなかったが、最低限の日常会話だけは頭に詰め込んだ。英会話といっても単語だけで会話ができたため、私としては日常会話、発音、聞き取りの3点さえ意識すれば大丈夫だと思う。留学中に、ジャネットの友達が誕生日だったのでホームパーティーをした。ジャネットの友達の子供は6歳で英語の勉強を始めたのは去年の7月からだそうだ。たった数か月で私よりはるかに流暢に英語を使っていた。6歳の子供でも母国語でない英語を学び、2ヵ国語を使えているので、留学を考えている人には頑張ってもらいたい。

最後に、留学を考えている人はぜひ行くべきだと思う。私は日ごろ一緒にいる友人が留学に行かないという理由で留学参加を迷っていたが今となっては後悔していない。外国に行くことで新たな自分の可能性、方向性を見出し、良い意味でのターニングポイントになると私は思う。



【ニュージーランド短期語学留学】

ニュージーランドでの貴重な生活

長橋 愛海（東北公益文科大学公益学部3年）

この1ヶ月間、私が過ごした時間すべてがとても新鮮だった。

3週間行った語学留学では、毎日バスを乗り継いで大学へ通学し、英語で授業を受け、外に面するカフェテリアで昼食をとった。今までバス通学というものを経験したことがない私にとっては、最初は不安しかなかったものの、慣れていくうちに他の学生と話したり、外の景色を楽しんだり、私なりに楽しむことができた。授業においては、韓国、フランス、チリなど、他の国からの留学生もたくさん参加しており、英語はもちろん、他の国の文化も少し知ることができた。先生方もとてもフレンドリーで、とても和やかな雰囲気の中で授業を受けることができ、とても楽しかった。毎週火曜日には日本語授業の先生のアシスタントとして、現地の学生と日本語で話し、新しい友達の輪を広げることができた。また、改めて日本語の難しさを実感した良い機会にもなった。大学が終わればほぼ毎日、公益大や他の大学の仲間と一緒に街に繰り出して遊んでいた。ニュージーランドは就業時間が短く、夜の6時には店がほとんど閉まってしまうという状態だったため、あまり長居はできなかったが、十分に楽しむことができた。

週末には大学のアクティビティとして、海や洞窟、乗馬などに行き、ニュージーランドの自然を心ゆくまで堪能することができた。休日には公益大のメンバーで高速バスに乗ってオークランドに行き、観光もした。

私の留学生活を支えてくれたホストファミリーは全員がとてもフレンドリーでアクティブな人たちだった。ホストファザーとホストマザー、その娘と息子の4人家族なのだが、他にも、同じ大学に留学している中国人の女性とチリ人の女性がホームステイしており、最初は緊張したが、2人もとてもフレンドリーで、夕飯にはみんなそれぞれの故郷について歓談した。途中からアメリカ人の女性もホームステイしており、彼女もとてもいい人だった。休日には、観光に連れて行ってくれ、他にも協会やローラースケート、バスケットボールなどにも連れて行ってくれた。私は、とにかくホストファミリーとコミュニケーションをとりたい、仲良くなりたいと考えていたため、できるだけホストファミリーと一緒に過ごすことを心がけ、つたない英語ではあったが一生懸命自分の思いを伝えていた。

日本にいた頃は、言わなくてもわかるだろうと、自分の思いを伝えることに一生懸命にはなっていなかった。しかし、この語学留学を通して、考えや意思は口にしなければ伝わらないのだということを学び、その大切さを痛感した。

3週間の大学課程を終えた後、私は1週間、幼稚園でインターシップを行った。主な仕事内容は先生の補助だった。子供たちへの昼食を出す手伝いや、おもちゃの片付け、簡単な清掃を行い、もちろん、子供たちと一緒に遊んだりもした。私は年長組を担当し、日本語が通じる人が誰一人いないということもありとても緊張していたが、先生方や子供たちが温かく私を迎え入れてくれたおかげで気負わずに研修に取り組むことができた。

インターンシップ先で過ごしたホームステイもとても充実したものであった。1週間という短い期間ではあったが、ホストファミリーも私に積極的に温かく接してくれたため、不安になることなく毎日楽しく過ごすことができた。ホストファミリーはホストファザーとホストマザーの2人だけだったが、とても明るくフレンドリーな夫婦だったため、寂しさなど微塵も感じなかった。私が充実したインターンシップを行うことができたのも、ホストファミリーが私を支えてくれたからだ。

インターンシップで学んだことは、ニュージーランドの法律の厳しさや、その土地の自然に適したケアを行うということである。ニュージーランドは個人情報に関する法律が厳しく、先生でさえも、子供たちの写真を撮影するときには保護者の同意書が必要なのだそうだ。また、ニュージーランドは日差しが強く紫外線も多いため、外で遊ぶときにはその都度、子供たちに日焼け止めを念入りに塗っていた。子供たちの体を考慮し、自然に適したケアを行う姿勢にとっても感銘を受けた。

語学留学やインターンシップで共通に感じたことは、現地の人々がとにかく温かい人たちであったということである。だからこそ、不安、不満を何一つ感じることなく過ごすことができたのだろう。私はこの短期語学留学プログラムに参加することができて本当によかったと思っている。

【ニュージーランド短期語学留学】

ハミルトンでの日常の一コマから

野口 彰太（東北公益文科大学3年）

私は、語学力の向上・英会話の上達に向けた学習を目指すため、今回の短期留学に参加した。

私のホストファミリーは、Palmerston Street（パーミストンストリート）在住の Feisst（フェイスト）家だった。ホストマザーは Lyn（リン）、ホストファザーは Malcom（マルコム）という名だった。二人とも60歳を超えているのだが、私の前にも何人もの留学生をホームステイとして受け入れており、ホストファミリー宅の居間には様々な国のお土産が飾られていた。今回のホームステイ前半でも私の他に、中国人の留学生（通称ライアン）のホームステイを受け入れており、中国人にも友人を作ることができた。また、留学生の出身国に関心を持ち、私が日本を紹介する時も熱心に聞いてくれた。ホストマザーは近所の警察署の受付で働き、ホストファザーは毎晩一時間以上かけてハミルトン国際空港に行き、シャトルバスを運転していた。

二人とも親切で温厚な性格で、困ったことは何でも相談に乗ってくれた。また、ニュージーランドの文化や生活を詳細に教えてくれた他、頻繁にハミルトンのレストランや観光地にも連れて行ってくれた。Feisst 家では留学生に、自分たちを Mum, Dad と呼んでもらうことをルールとしていた。私は初め、その呼び方が少々ぎこちないものになったが、Feisst 家に馴染むうちに本当の母・父のように接することができるようになった。

私が体調を崩し風邪をひいて、日本から持参した薬も切らしてしまった際には、日本人の体にも合う飲み薬を用意してくれた。

ホストマザーはよく近所のファーストフード店でフィッシュアンドチップスなどの食事を済ませる人物であったが、時折自宅で料理を作ることもあった。私は日本から持ってきた材料とニュージーランドで買った肉とを使い、ホストファミリーにお好み焼きを振舞った。

ホストマザーはよく私とライアンを地元のスーパーマーケットである Countdown（カウントダウン）に連れて行ってくれた。このスーパーマーケットは滞在中、度々単独行動でも利用することになった。また、ホストマザーはよくハミルトンの観光名所にも連れて行ってくれた。例えば、世界各国の庭を再現したローズガーデンという公園だ。インドやイタリア・中国・日本の庭園もあり、ニュージーランド人の遊び心が窺える観光地だった。

ホストマザーは観光地だけでなく、ニュージーランドでの生活についても様々なことを教えてくれた。地元の巡回バス、Orbiter（オービター、英語で「衛星」）の乗り方を教わり、毎日ワイカト大学とホストファミリー宅を往復した。初日の放課後には、ホストファ

ミリー宅の近所のハミルトンレイクという観光地にもなっている湖を紹介してもらった。湖畔に大きなカフェや公園のある美しい湖だった。地元住民の憩いの場になっているようで、酒田市の飯森山公園や日和山公園のような場所であると思われた。

ワイカト大学では、私たちは複数のクラスに分かれて授業を受けたが、クラスには関西の大学からの留学生や、フランス・チリなどの国々からも留学生が参加していて刺激を受けた。また、放課後に利用した大学の図書室の充実した蔵書の中には日本で出版された日本語のものもあり、ワイカト大学の留学生への気配りと多国籍性を垣間見た。

ハミルトンは赤道をはさんで日本に緯度が近いこともあり、日本人には暮らしやすい気候だった。また、温暖な気候もあってか穏やかな人も多く、日本人同様に人をもてなす心を持っていた。そういった土地への留学・ホームステイは良い経験を育むだろう。

最後に、私が短期語学留学に際し立てた目標とその達成度を下記に記す。

<短期語学留学の目標と達成度>

語学力

- ① 相手の言うことが聞き取れて、理解できるようになる。 - ③
- ② 日常会話の表現、言い回しを使いこなせるようになる。 - ①
- ③ 自分の意見を積極的に発信できるようになる。 - ②
- ④ 積極的に会話に参加する。 - ④
- ⑤ 英文のテキストの内容を読み取れるようになる。 - ③
- ⑥ ⑤に加え、読み取った内容を自分なりに考察できるようになる。 - ①
- ⑦ 英単語を覚え、語彙力をつける。 - ②
- ⑧ 英語で自己紹介できるようになる。 - ④
- ⑨ TOEICにも生かせる実力を付ける。 - ①
- ⑩ イントネーションを磨く。 - ④

生活全般

- ① 慣れない文化圏、生活環境にも対応できるようになる。 - ②
- ② 体調管理に気を付ける。 - ①
- ③ ホストファミリーと過ごす時間を大切にする。 - ⑤
- ④ 日本との文化の違いに気を付ける。 - ②
- ⑤ 早寝早起きを心掛ける。 - ②
- ⑥ 衣服などの身嗜みに気を付け清潔感を持つ。 - ④
- ⑦ 無駄遣いをしない。 - ②
- ⑧ 荷物は常日頃から整頓し、必要な物をすぐ取り出せるようにする。 - ④
- ⑨ 怪我をしないように注意する。 - ⑤
- ⑩ ホストファミリーに心配をかけることはしない。 - ④

【シンポジウム報告】

シンポジウム「東日本大震災・復興を考える」開催報告

和田 明子（東北公益文科大学教授）

2013年3月20日（水・祝）、東北公益文科大学酒田キャンパス301教室（大教室）にて、シンポジウム「東日本大震災・復興を考える」が開催された。主催は東北公益文科大学公益総合研究センター、共催は早稲田大学現代政治経済研究所、後援は日本学術振興会であった。当日のプログラムは次のとおりである。

総合司会：武田真理子（公益総合研究センターニュージーランド研究所員・本学准教授）

13:00～13:10 開会の辞 天川晃（横浜国立大学名誉教授）

和田明子（公益総合研究センターニュージーランド研究所長・本学教授）

13:10～14:10 基調講演 柄谷友香（名城大学准教授）「東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と可能性」

14:20～16:00 研究報告・パネルディスカッション

報告Ⅰ（25分） 松井望（首都大学東京准教授）「震災2年目の復興行政の現状 現地調査からみたその進みと遅れ」

報告Ⅱ（25分） 和田明子（東北公益文科大学准教授）「ニュージーランド・カンタベリー地震の復興行政から学べること」

パネルディスカッション（50分）

コーディネータ：稲継裕昭（早稲田大学教授）

パネリスト：柄谷友香（名城大学准教授）

松井望（首都大学東京准教授）

和田明子（東北公益文科大学准教授）

このシンポジウムは、東日本大震災の復興プロセスを行政・地方自治の側面から調査している日本学術振興会東日本大震災学術調査行政・地方自治班と、ニュージーランドのカンタベリー地震の復興プロセスを調査している本学公益総合研究センターニュージーランド研究所が、それぞれの間接成果を発表するための共同で開催したものである。日本学術振興会東日本大震災学術調査は、
ものであり、
の8班で構成されている。このうち行政・地方自治班は、行政・地方自治の側面から調査を行うチームであり、2012年度の構成メンバーは次のとおりである（敬称略）。

稲継裕昭（早稲田大学）（班長）

天川晃（横浜国立大学名誉教授）
阿部昌樹（大阪市立大学）
伊藤正次（首都大学東京）
遠藤哲哉（青森公立大学）
北村亘（大阪大学）
小原隆治（早稲田大学）
西出順郎（岩手県立大学）
松井望（首都大学東京）
和田明子（東北公益文科大学）
河合晃一（早稲田大学大学院公共経営研究科博士後期課程）

基調講演は、柄谷友香名城大学准教授にお願いした。柄谷先生の専門は都市防災計画・都市地域計画で、東日本大震災の発災当初から岩手県陸前高田市に住み込んで復興支援にあたっていた。基調講演では、

【研究所から】

『ノート』メモ

◇ 2013 年度の『ニュージーランド・ノート』をここにお届けいたします。たいへんお忙しい中ご寄稿くださった皆様にあらためて感謝いたしますとともに、このように発行がたいへん遅れましたことを心からお詫びいたします。昨年度から本ノートは電子版 (<http://iaks.koeki-u.ac.jp/modules/about2/>) での発行となりました。

◇ 2013 年度の研究所の活動は次のとおりでした。

1. 研究会の開催

第 37 回（日本ニュージーランド学会及びニュージーランド学会との合同研究会）

2013 年 10 月 26 日（土）13:30－16:30

大東文化大学板橋キャンパス 3 号館 30114 教室

第 1 報告 武田真理子・和田明子（東北公益文科大学）「カンタベリー地震の復興プロセス：市民・行政の連携を中心に」

第 2 報告近藤真（岐阜大学）「ニュージーランドの改憲構想と日本の改憲構想：グローバルイノベーションにおける『新立憲主義』の台頭」

第 3 報告 斉藤達雄（日本ニュージーランド学会理事）「核を持たぬニュージーランド」

2. ニュージーランド・ノートの発行

第 16 号（本号）を電子版で 2014 年 3 月末日付けで発行した。

大学の経営方針により研究所の支出が認められませんでしたので、2013 年度の活動は上記のみとなりました。

ニュージーランド・ノートにつきましては、昨年度からの電子化に伴い ISSN を取得するとともに、山形県内高等教育機関研究者の研究成果物を学外に発信・提供する「ゆうキャンパスリポジトリ（学術成果発信システムやまがた）」にも登録するなど、学術的意義の向上と社会的周知・活用度の向上に努力しました。今後とも同じ方針で努力してまいります。

◇ 2011 年 2 月 22 日のカンタベリー地震発生から 3 年が経ち、クライストチャーチ中心部の立入禁止区域も解除されました。少しずつ復興のきざしが見えてきたでしょうか。キー国民党政権は、政権 2 期目の優先事項の一つとして「クライストチャーチの再建（rebuild Christchurch）」を掲げ政策を進めてきました。そのキー政権も 2014 年 9 月 20 日に総選挙を迎えます。2014 年度前半は、復興政策を含めこれまでキー政権が進めてきた政策の是非に関する議論が大に行われる 1 年になりそうです。

◇ 次号の発行は2014年度末を予定しています。原稿は随時募集しておりますので、編集長（wada@koeki-u.ac.jp）までメールでお送りください。編集委員会で精査の上、掲載の可否を連絡いたします。

◇ 本号の発行に際しましてたくさんの方々にお世話になりました。特に、事務担当の川上健太郎さん、英文タイトルをチェックしてくれた菅井マリー先生にこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

◇ 研究所員一覧

学内研究員：呉尚浩、澤邊みさ子、武田真理子、竹原幸太、遠山茂樹（副所長）、水田健輔、森彰夫、和田明子（所長）

学外研究員：石原俊彦（関西学院大学）、岡田良徳（大東文化大学）、小松隆二（白梅学園理事長・元ニュージーランド研究所長）、斉藤達雄（元ニュージーランド研究所長）、高橋康昌（群馬大学名誉教授）、原田壽子（立正大学名誉教授）、宮崎智世（ニュージーランド大使館）、宮本忠（元ニュージーランド研究所長・三重大学名誉教授）、山岡道男（早稲田大学）、山崎俊次（大東文化大学）

院生研究員：佐藤丈晴（本学大学院修士課程）、高橋範行（関西学院大学大学院経営戦略研究科博士後期課程・岩手県北上市役所）

ニュージーランド・ノート 第16号

2014年3月31日発行

発行所 東北公益文科大学 公益総合研究センター ニュージーランド研究所
〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町14番1号 電話0235-29-0555
